

50521

教科書文庫

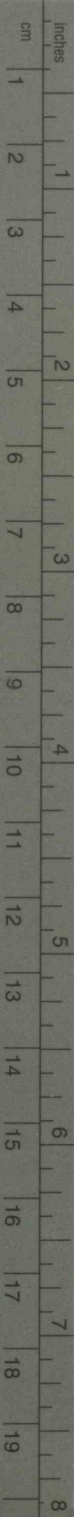
5
810
34-1948
20000 19408

Kodak Gray Scale



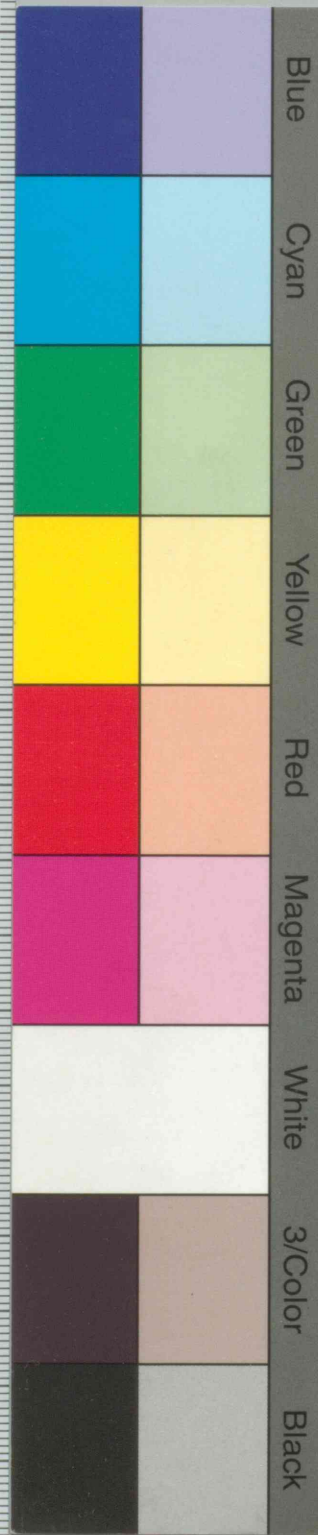
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



文部省著作教科書

國語

第三学年

下



資料室

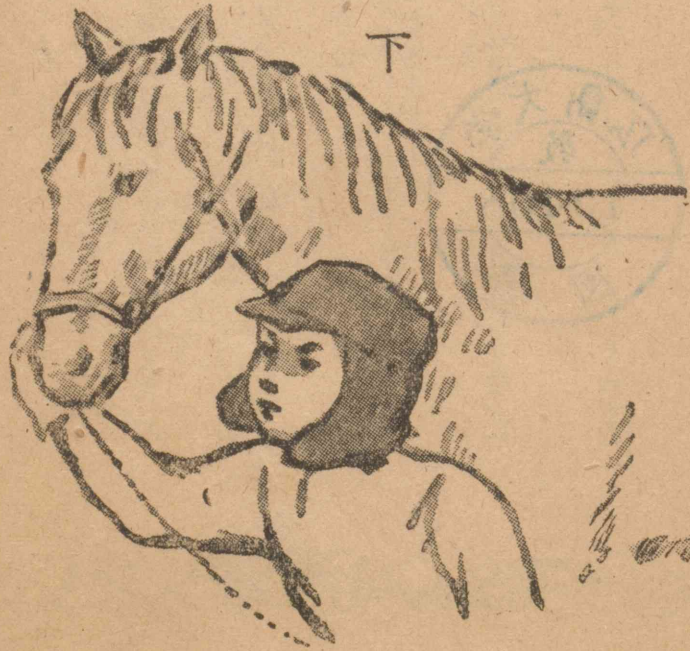
3759
M014

國

語

第三學年

下





十一	十	九	八	七	六
うさぎさん	たこ	ぼくの発見	つりばりのゆくえ	だれのか	かべ新聞
.....
百二十一	百十四	九十九	八十	七十	五十六



廣島大学図書印



五	四	三	二	一
月と雲	空のうた	かかし	イソップものがたり	小さなねじ
.....
五十一	四十六	三十一	十三	四

もくろく

小さなねじ.....四

イソップものがたり.....十三

ありとほど

ありときりぎりす

かかし.....三十一

空のうた.....四十六



月と雲.....五十一

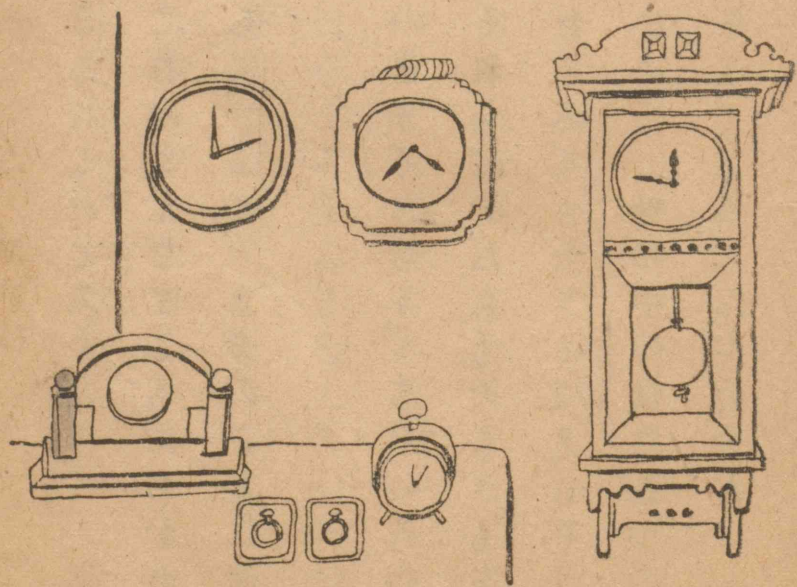


一 小さなねじ

くらはいはこの中にしまいこまれていた、小さな鉄のねじが、ふいにピンセットにはさまれて、明かるいところへだされた。ねじは、おどろいてあたりをみまわしたが、いろいろな音や、みたこともないような物が、ごたごたと耳にはいり、目にはいるばかりで、なにがなにやら、さっぱりわからなかった。

しかし、だんだんおちついてみると、ここは時計屋の店であることがわかった。自分のおかれているのは、しごと台の上ののっている小さなふたガラスの中で、そばには小さなし

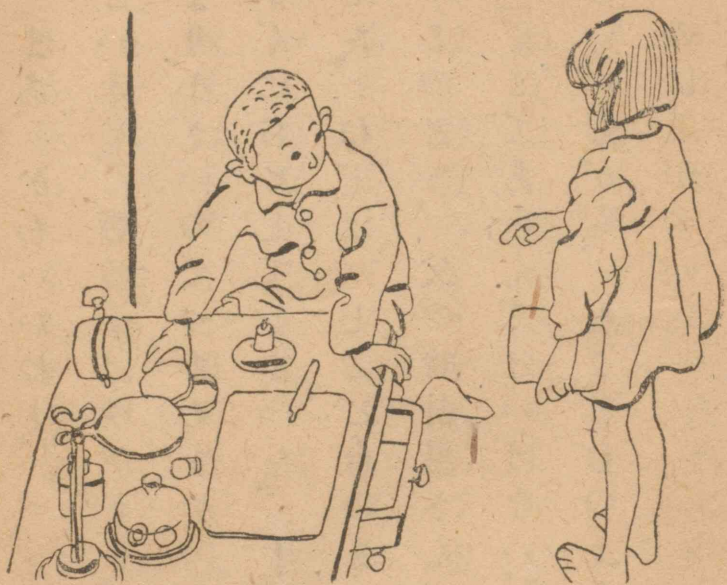
んぼうや、は車や、ぜんまいなどがならんでいる。きりや、ねじまわしや、ピンセットや、小さなつちや、さまざまの道具も、おなじ台の上によこたわっている。まわりのかべやガラス戸だには、いろいろな時計がたくさんならんでいる。カチカチと氣ぜわしいのはおき時計で、カッターカッターとおうようなのははしら



時計である。

ねじは、これらの道具や時計をあれこれとみくらべて、あれはなんの役にたつのだらう、これはどんなところにおかれるのだらうなどと考えているうちに、ふと、自分のことに考えおよんだ。

「なんという小さい、なさけない自分であらう。あのいろいろな道具、たくさん時計、それらはかたちも大きさもそれぞれちがってはいるが、どれをみても大きくてえらそうである。ひとかどの役目をつとめて、世の中の役にたつのに、どれもこれも不足はなさそうである。ただ自分だけがこのように小さくて、なんの役にもたちそうにない。ああ、



なんというなさけない身のうえであるう。」
ふいにバタバタと足音がして、小さな子どもがふたり、おくからかけだしてきた。男の子と女の子である。ふたりはそこらを見まわしていたが、男の子は、やがてしごと台の上のものをあれこれといじりはじめた。女の子はただじっとみつめていたが、やがてこ

の小さなねじをみつけて、

「まあ、かわいいねじ。」

というど、男の子はゆびさきでそれをつまもうとしたが、あまり小さいのでつまめなかった。やっどつまんだと思うと、すぐにおどしてしまった。子どもたちは思わずかおをみあわせた。ねじは、しごと台のあしのかげにころがっていった。

このとき、父の時計屋さんがはいつてきた。時計屋さんは、「ここであそんではいけない。」

といいながら、しごと台の上をみて、だしておいたねじのな
いのに気がついた。

「ねじがない。だれた。しごと台の上をかきまわしたのは、

ああいうねじはもうなくなって、あれ一つしかないのだ。

あれがないと、町長さんのかいちゅう時計がなおせない。

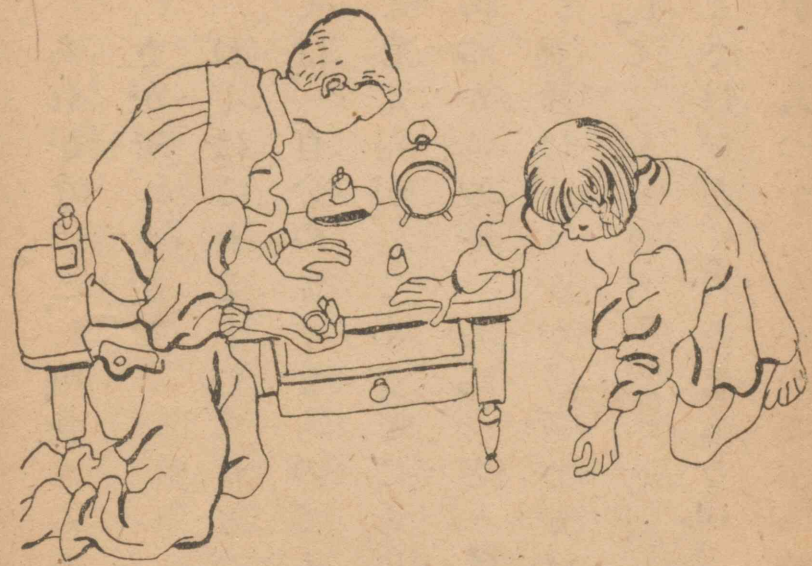
さがせ、さがせ。」

ねじはこれをきいて、とびあがるほどうれしかった。「それでは、自分のようなものでも、役にたつことがあるのかしら。」と喜んだが、「こんなところにくろけおちてしまって、もし、みつからなかったら。」と、それがまた心配になってきた。

親子はそうがかりてさがしはじめた。ねじは、

「ここにいます。」

とさけびたくてたまらない。三人はさんざんさがしまわったが、みつからないのでがっかりした。ねじもがっかりした。



そのとき、いままで雲にか
ぐれていたたいようがかおを
だしたので、日光が店いっぱ
いにさしこんできた。すると、
ねじがその光を受けて、ピカ
リと光った。しごと台のそば
で、ふさぎこんで下をみつめ
ていた女の子が、思わず「あっ。
とさげんだ。時計屋さんも喜
んだ。しかし、いちばん喜ん
だのはねじであった。

時計屋さんは、さっそくピンセットでねじをはさみあげて、
だいじにもとのふたガラスの中へ入れた。そうして、一つの
かいちゅう時計をだしてそれをいじっていたが、やがて、ピ
ンセットでねじをはさんで、きかいのあなにさしこみ、小さ
なねじまわしでしっかりととめた。

りゅうずをまわすと、いままで死んだようになっていたか
いちゅう時計が、たちまち、ゆかいそうにカチカチと音をた
てはじめた。ねじは、自分がここにはいったために、この時
計ぜんたいが、ふたたび活動することができたのだと思うと、
うれしくてたまらなかった。時計屋さんは、しあげた時計を
ちよっと耳にあててから、ガラス戸だなのの中につりさげた。

一日おいて、町長さんがきた。

「時計はなおりましたか。」

「なおりました。小さなねじ

が一本いたんでいましたか

ら、とりかえておきました。

ぐあいのわるかったのは、

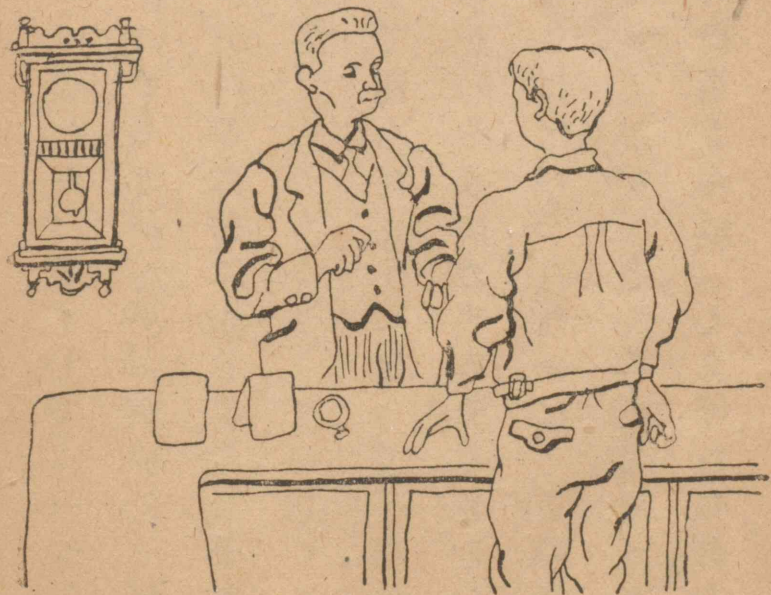
そのためでした。」

「といってわたしは、ねじは、

「自分もほんとうに役にたっ

ているのだ。」

と、心からまんぞくした。



二 イソップものがたり

ありとはと

一びきのありがいました。あついで日中の道を、ものを運び

ながら歩いてくると、のどがかかきました。

「ちようど、そばに小川が流れていました。」

「ありは、川の岸で、うつむいて水をのもうとしました。も

うすこして口が水にとどきそうになったとき、足がつるりと

すべって、「あっ。」というまに、川の中におちてしまいました。

「助けて、助けて。」

ありは大きな声をだしてさ
けびました。けれども、だれ
もきてはくれません。

「助けて、助けて。」

ありは、いっしょうけんめ
いにさけびつづけました。

それを一わのはとがみつけ
ました。はとは、いそいで木
の葉をとって、ありのそばに
おとしてやりました。

木の葉は船のようになって、



ありのそばを流れました。

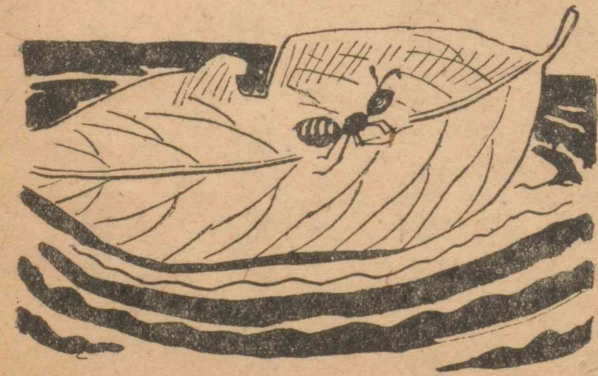
「ありがたい。」

ありはそういって、すぐ木の葉の船につか
まりました。そうして

その上に乗りました。

木の葉の船は波に流されて、川の岸
につきましたので、ありは、ぶじに岸
にあがることができました。

「ああ、助かった。もし、あの木の葉
の船が流れてこなかったら、どうなっ
ていたかしのれない。」



ありは、心から木の葉におれいをいいました。

そのとき、ありのまえをひとりのかりうどが弓矢を持って通りました。

そのかりうどは、きゆうに歩くのをやめて、弓に矢をつがえて、木の上をねらいました。

木の上には、一わのはどがとまっています。はどは、ねらわれていることを知らずにいました。

ありは、いそいでかりうどのすねにはいのぼりました。そうして、カいっぱいくいつきました。小さなありでも、カまかせにかんだので、かりうどもびっくりして、

「あいたたた。」

と、大きな声をたてました。

その声をきいて、はどが下の方をみますと、かりうどが矢をつがえているではありませんか。

「あぶないところだった。」

と、いって、大いそぎで木からとびたっていきました。

ありときりぎりす

一のばめん

まくがあくと、きりぎりすが大ぜいあつまって、音楽会をし

ています。あるきりぎりすはバイオリンをひいています。あ
るきりぎりすはチェロをひいています。あるきりぎりすはふ
えをふいています。そのほか、ハーモニカをふいているもの、
オルガンをひいているもの、たいこをたたいているもの、シ
ロフォンをたたいているもの、そのうしろに合唱隊がならん
で、うたをうたっています。まん中に、しきしやがタクトを
いつしんにふっています。しばらく音楽がつづいてから終り
ます。

しきしや 「上でき。上でき。」

と、さもまんぞくそうにしき台をおりてきて、あせをふきま
す。

バイオリンの
きりぎりす

「なかなかよくあったね。」

チェロの
きりぎりす

「ほんとうにいい氣持だ。」

たいこの
きりぎりす

「こんなによくあうと、た

いこのうちがいもあるよ。

じつにゆかいた。」

オルガンの
きりぎりす

「みどりの木の葉は喜びに

みち、きよらかな風は、

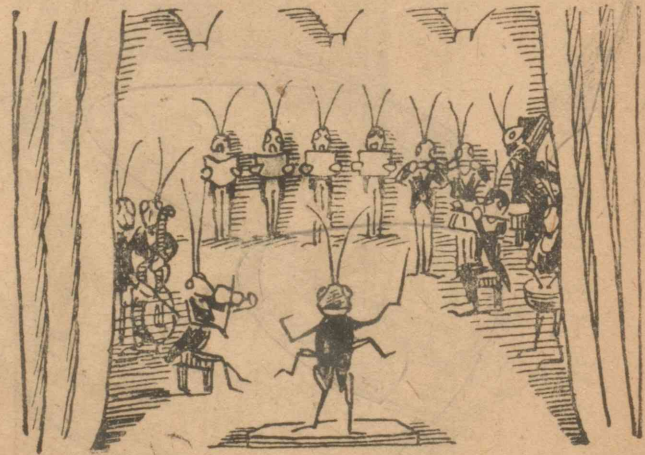
われわれの音楽をほめて

くれる。」

ふえの
きりぎりす

「たいへんきれいなもんくをいいましたね。こんな樂

しいときは、二どとありませんね。」



しきしゃ 「おいしいにうたい、おいしいにひいて、この夏の日を樂
しもうではないか。」

うたをうたう
きりぎりす 「そのとおり、そのと

おり。」

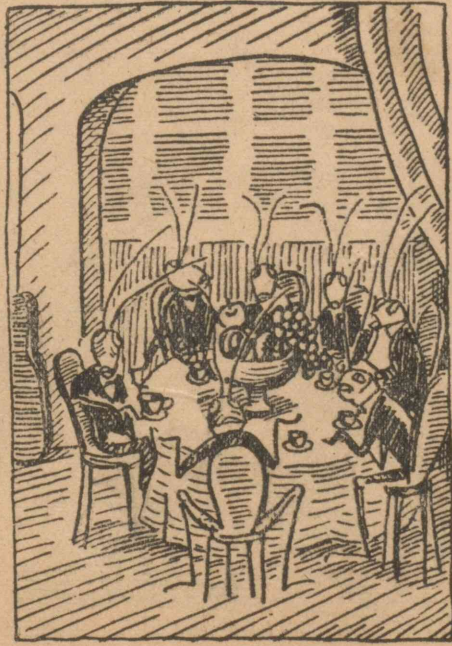
シロフオンの
きりぎりす 「さあ、ひと休みしよ

うてはありませんか。」

みんな 「そうしよう、そうし

よう。」

テーブルのまわりにあつまつ
て、まるくなります。テーブルには、お茶が用意してあり、
くだものが、たくさんおさらにもってあります。みんな、樂



しそうにそれをたべます。

オルガンの
きりぎりす 「美しいぶどうに、かがやくりんご、楽しいわれら

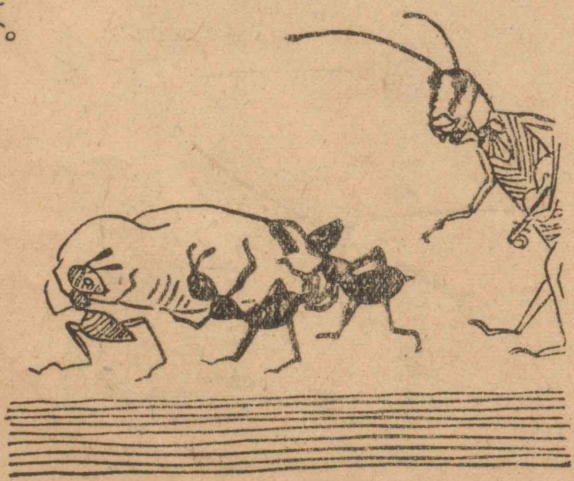
きりぎりすの生活——」

こんなことばをみんな喜んできい
ています。

そのとき、しもてから、ありが三

びき、ゆつくりできてきます。

大きな荷物を、力をあわせて運ん
できます。



たいこの
きりぎりす 「おやおや、ありさんがきたよ。
バイオリンの
きりぎりす 「大きな荷物だな。」

チェロの
きりぎりす 「ありさん、ありさん。」

よばれても、ありたちは気がつきません。

シロフオンの
きりぎりす 「ありさんったら、ありさん。」

ありたちははじめて気がついて、

ありー 「あ、だれかと思ったら、きりぎりすさんでしたか。」

あり二、三 「きりぎりすさん、こんにちは。」

シロフオンの
きりぎりす 「こんにちは。きみたち、どこへいくの。」

ハーモニカの
きりぎりす 「そんな大きな物を持ってさ。」

あり三 「うちへ帰るところなんです。」

バイオリンの
きりぎりす 「ここでいっしょに音楽会をやるうじゃないか。」

あり二、三 「」

チェロの
きりぎりす 「いいだろう。いまあそばないで、いつあそぼうとい

うのさ。わるいことはいわない。さあ、はいりたま

え。」

あり二 「でも。」

シロフオンの
きりぎりす 「どうだい。いい

じゃないか。」

バイオリンの
きりぎりす 「バイオリンをちよつとひいて、いい音だろう。きれ

いな音だろう。」

たいこの
きりぎりす 「たいこをドンドンたたいて、ぼくがひょうしをとつ

てあげる。ここで楽しくあそんでおいで。」

あり一 「せっかくですが、わたしたちはみんな、はたらくや

チェロの
きりぎりす

くそくをしているのです。』
「はたらくやくそくだって。まあいや、こんないい
ときにあそばないで、いつあそぼうというんだね。
楽しむために生きているんじゃないか。」

あり三

「でも、わたしたちは、はたらけるときにはたらくの
ですよ。さあ、おそくなるからでかけよう。」

と、いって、あり一、二をさそい、大きな荷物を、「一、二の三。」

と、かけ声をかけて持ちあげます。

しきしやの
きりぎりす

「苦勞しようのありさんたちだな。」

バイオリンの
きりぎりす

「こんな楽しさも知らないで、氣のどくなありさんた
ちだよ。」

オルガンの
きりぎりす

「小さなからだに大きな荷物。荷物がありが、ありが
荷物か。」

みんな「ははははあ。」

「ありはなんにもいわないで、おもい足どりでかみてにさって
いきます。」

しきしや

「われわれは、おおいにうたおう。」

シロフォンの
きりぎりす

「うたおう、うたおう。」

オルガンの
きりぎりす

「楽しみはいよいよくわわり、喜びはさらにたかまる。」

みんなにぎやかに音楽をはじめます。

二のばめん

かみて半分はありのいえの中、しもて半分はそとになつて
います。雪がちらちら降つていて、夕ぐれに近いころ。

あり一 「まどからそとをみて、「雪が降ってきた。」

あり二 「今夜はつもるかもしれない。」

あり三 「風がでてこなければいいね。ふぶきはいやだから。」

あり一 「さ、そろそろ夕ごはんにしようか。」

あり二、三 「そうしよう。」

あり一は、ろの火を赤くもえたたせます。

あり二、三 「ああ、あたたかい、あたたかい。」

あり一 「夏のあいだに、こんなにたきぎをあつめておいて、
よかったね。」



あり二 「ほんとうだ。でも、夏のころはあつくてたいへんだっ
た。」

あり三 「毎日あせだくだったね。」

あり一 「そのおかげでさ、いまこり

してあたたまることもでき

るし、たべものもじゅうぶ

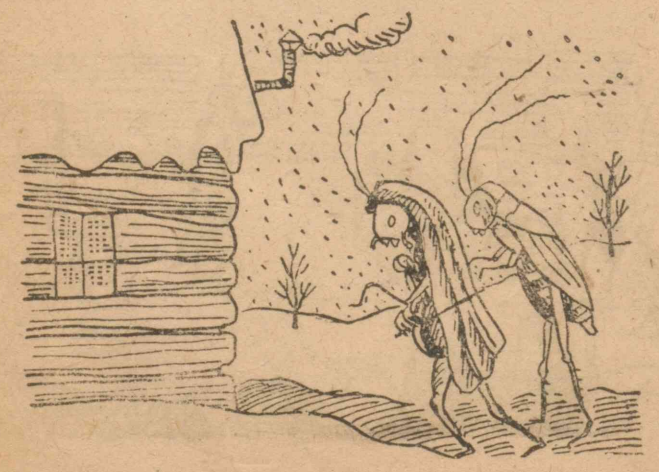
んたべられるというわけだ。」

あり三 「はたらかないものには、こ

の楽しさ、この喜びはあじ

わえないだらう。」

あり二 「たしかにそうだ。」



このとき、戸のそとに、きりぎりすが二ひきたずねてきます。ぼうしもかぶらず、がいどうもきていません。

きりぎりす一 「まあ、おねがいしてみよう。」

きりぎりす二 「ふたりでたのめば、なんとかなるだろう。」

きりぎりす一が、戸をトントんとたたきます。

あり三 「おや、だれかたずねてきたらしい。」

あり一、二が戸の方をみています。

あり三 「おはいり。」

戸をあけて、きりぎりす一、二がはいってきます。

あり三 「きりぎりすさんじゃないか。」

きりぎりす一、二 「ていねいにおじぎをしながら、「しばらくでしたね。」

あり一 「お元氣ですか。」

きりぎりす一 「お元氣どころか、このとおりすっかりよわって。」

きりぎりす二 「なにかめぐんでください。」

きりぎりす一 「すこしてもいいから、わけてください。」

あり一、二、三 「」

きりぎりす一、二 「どうかたのみます。」



あり一 「どうしよう。」

あり二 「かわいそうだね。」

あり三 「花のみつをわけてあげよう。」

あり一が、おくの方からみつをびんにいれてもってきます。
それをきりぎりすにわたします。

きりぎりす
一 「ありがとうございます。」
二 「ありがとうございます。」

なんどもお礼をいってたちさります。雪がたくさん降ってきます。
ます。

まく

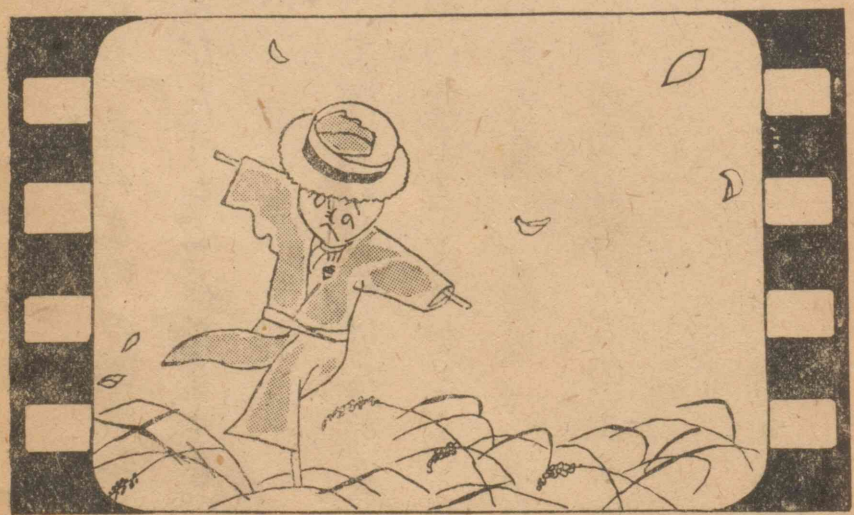
三 かかし

これは、まんがの
シナリオです。

1 はげしい風。いねが波の
ようにゆれる。

2 かかしが、「へのへのもへ」
の顔で、風に向かって立っ
ている。きものすそが

3 風にあおられる。
雲がちぎれてとぶ。



4 木が大ゆれにゆれる。木の葉がとぶ。

5 かかしのまゆがまっすぐにのびる。目だまの「の」字がくるくるまわる。口の「へ」字がのびたりちぢんだりする。

6 「これぐらいの風にまけるものか。」

7 かかしの顔に葉がとびかかる。てっぺんのぬけたかんかんぼうしがふきとばされる。顔のうしろを雲がとぶ。

8 いねが大きく波うつ。はげしい風の音。

9 かかしが風にまきあげられる。糸の切れたたこのように、空にすいこまれていくかかし。

10 からすの子が、びっくりしてすからとびだし、空をみあげる。

11 おかあさんがらすが、羽をさか立てて、子からすをすに

ひきもどす。

12 白いひげの雲が風に流されていく。

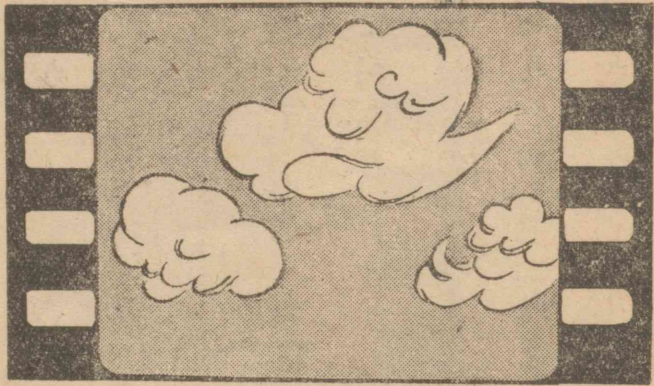
13 風を受けるたびに雲のからだのかつこうがかわる。

雲 「おや、かかしくんじゃ

ないか。」

かかし 「助けて——雲のおじさん。」

かかし 「ああ、おどろいた。生まれてはじめての大風だ。雲のおじさん、わたしのたんぼはどこでしょう。」



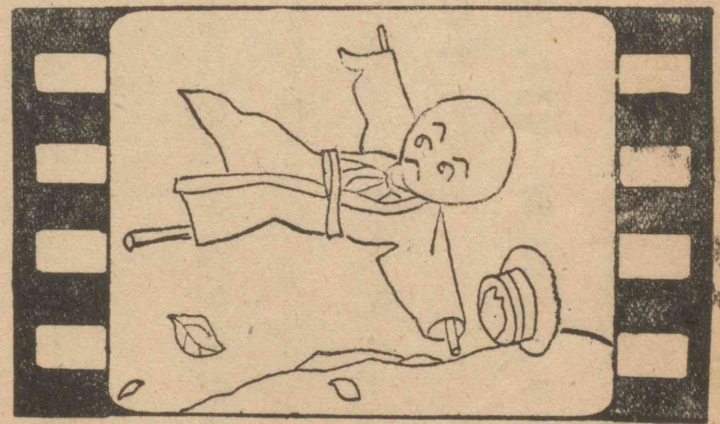
雲

「山のかげにかくれて、ここからはみえないよ。」

風がふく。雲のひげがあおられて長くのびる。かかし、一どははねあげられるが、もんどりうって、また、ひげの中におちる。

14

15
かかしの目だま、ぐるぐるまわりながら、大きくなったり、小さくなったりする。口をもぐもぐさせている——声がでないのである。



雲

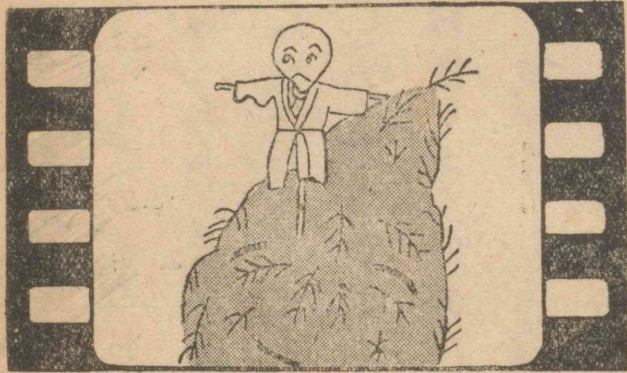
「だいたいぶかい。」

かかし「なんてらんぼうな風なんだろう。おじさん、大風つてこわいな。」

雲

「ないたりあれたり、海みたいなものさ。ほう、また、すごいのがくるぞ。」

16
また、風。かかしのつかまったひげ、のびるだけのびてちぎれてしまふ。
17
くるくるまいながらおちていくかかし。



18 大すぎの上にやっととまったかかし。

かかし「すぎの木のおばさん、助けて。」

すぎ「あら、子どものかかしだね。かわいそうに。根の方へおりていらっしやい——ああ、またふいてくるよ。

早く、早く、あつ。

19 おれるようにあたまを地につけるすぎの木。はげしい風の音。

20 高くふきあげられて、空にきえていくかかしとつ点になって、おしまいにはみえなくなってしまふ。

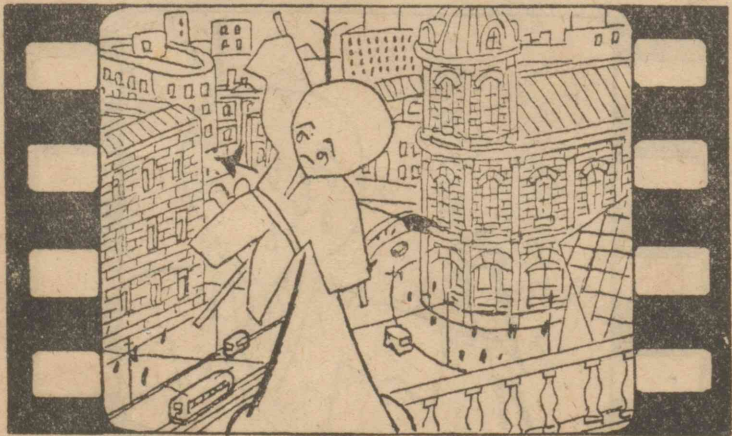
21 風の音がよわくなる。それにつれて、空がうす赤くなってくる。夕やけ雲がうかんでいる。

22 ビルディングが立ちならんでいる町。ラジオの音楽。

23 そのビルディングの一つの窓からどがった屋根にひっかかっているかかし。

24 顔の大写し。「の」字のはねたさきから、雨だれのようななみだがこぼれおちる。はなが動く。口が動く。

25 ずっと下にみえる夕やけの大通りを、豆つぶほどの自動車や電車が、ひっきりなしにゆききしている。



立ちならぶビルディングのあいだから、とびあがってくる親子のつばめ。

子つばめがかかしをみつける。

子つばめ「おかあさん、なんでしよ

う。あの屋根にとまっ

ているのは。」

親つばめ「さああなたに

親子のつばめ、屋根のそばを通りぬけ、また、もどってきかかしの近くにとまる。

親つばめ「まあまあ、かかしさんです。ね。どうしたの、いっ

たい。」

かかし「ふきとばされたんです。きょうの大風に。」

子つばめ「へえ。きみ、どこにいたの。」

かかし「あの山のかげの、ずっと遠いたんぼだけど、ぼく、もう帰れないんだ。」
なみだをぼろぼろこぼす。

す。

親つばめ「でも、村に帰らなくちゃ。あなたのしごとはこ

れからよ。わたしたちのなかまがわるい虫をとっ

てそだてたいねを、こんどは、あなたがたがま

もるんですもの。」

かかし「そりゃそうだけど——」

立ちならぶビルディングのあいだから、とびあがってくる親子のつばめ。

子つばめがかかしをみつける。

子つばめ「おかあさん、なんでしよ

う。あの屋根にとまっ

ているのは。」

親つばめ「さああなたに

親子のつばめ、屋根のそばを通りぬけ、また、もどってきかかしの近くにとまる。

親つばめ「まあまあ、かかしさんです。ね。どうしたの、いっ

たい。」

かかし「ふきとばされたんです。きょうの大風に。」

子つばめ「へえ。きみ、どこにいたの。」

かかし「あの山のかげの、ずっと遠いたんぼだけど、ぼく、もう帰れないんだ。」
なみだをぼろぼろこぼす。

す。

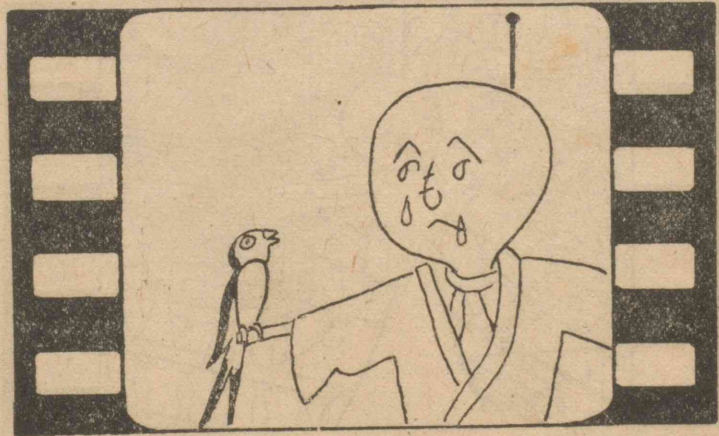
親つばめ「でも、村に帰らなくちゃ。あなたのしごとはこ

れからよ。わたしたちのなかまがわるい虫をとっ

てそだてたいねを、こんどは、あなたがたがま

もるんですもの。」

かかし「そりゃそうだけど——」



親つばめ 「ああ、いい考えがある。心配しないでまってい
らっしゃい。すぐ帰ってきますから。」

29 親つばめ、子つばめをつれてさる。
30 のこされたかかしの大寫し。

かかし 「帰るといったって、あんな遠いところ
もう一どあの村に帰りたいなあ。」

31 かかしのまわりに、村の子どもや、森や、小川や、いな
田などの、きれいな、楽しかった思い出が、うかんで
きえていく。

32 日がくれかかる。夕やけがばら色にこくなる。かかしの
顔まで赤くなる。

33 ビルディングのまどに、一つ二つと火がつく。

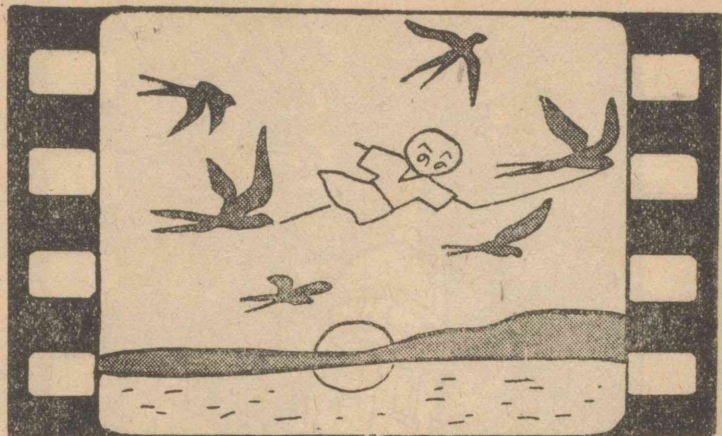
34 ビルディングのあいだから、つ
むじ風のように、列をつくった
つばめのむれが、かかしの方へ
とんでくる。

35 親つばめと子つばめが、かかし
のそばにとまる。

親つばめ 「さあ、かかしさん、い
まから帰るのよ。」
子つばめ 「みんなできみをおんぶ
するんだ。」



かかし「みなさんで。」



親つばめ「南へひきあげるついて

だから、えんりよしな

くてもいいのよ。さあ、

みなさん、日がくれき

らないうちにおねがい

します。」

36

つばめのむれ、屋根の上にひと
かたまりになる。それがほぐれ
て、一列にビルディングをはな

れる。かかしが列のまん中にはいっている。

37

しずんでいくお日さまをおって、
とぶつばめのむれ。

38

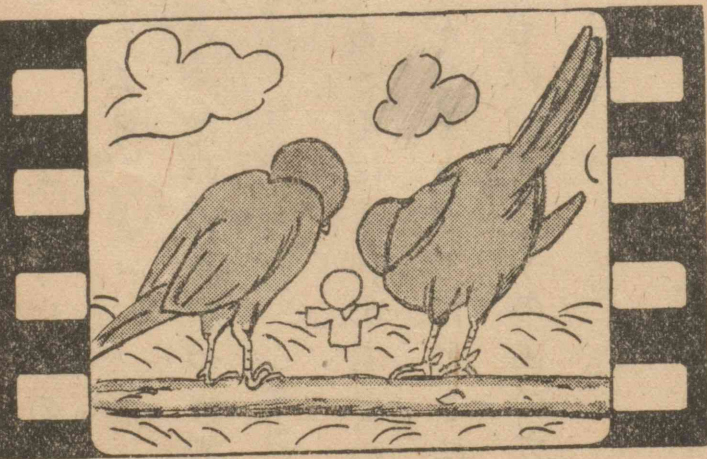
山や、みずうみや、はたけの上
をひとかたまりになってとぶつ
ばめのむれ。

39

その列が空にすいこまれていく。
それをつつむようにして日がく
れる。美しい空の色。

40

青黒い夜空に大きな三日月さま
にわたりの声。さわやかな朝の



41

空。白い雲。

木の枝にとまっている二わの子がらす。

子がらす一

「ほら、みてごらんよ。ほんとうにあの
かしが帰っているだろ。」

子がらす二

「うん、そうだけど、いったいだれがつれて
帰ったんだろ。」

子がらす一

「おとうさんやおかあさんにもわからない
んだって、そうぼくが目をさましたときに
は、おびみたいなものが向こうの山の方
へとんでいったんだよ。」

子がらす二

「なんだろうな、それ。」

子がらす一

「さあ、あのかかしたら、『さようなら』」

とか、『ありがとう。』とか、

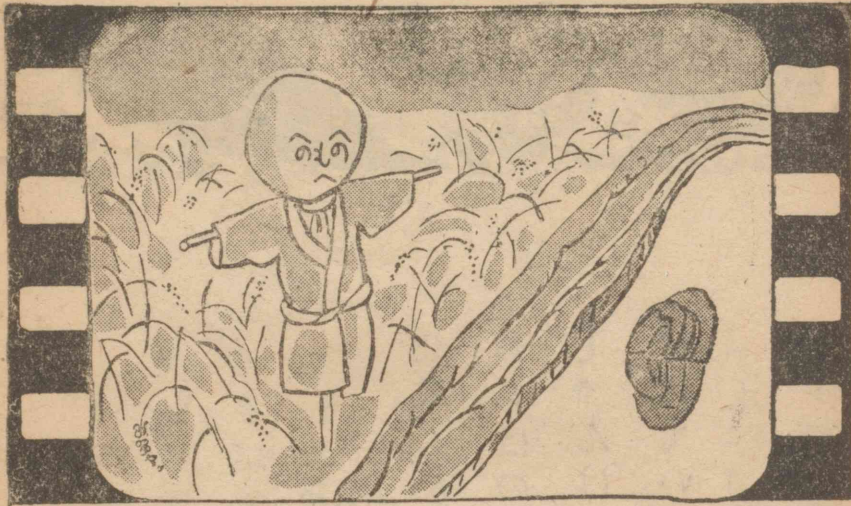
なんべんもなんべんも

さけんでいたよ。」

43

「へのへのもへののかかしが、む
ねをはって、目をむいて、た
んぼをみわたしている。」

かかしの目のまえに、風にそ
よぐ金色のいねが、いちめん
につづいている。





四 空のうた

おちば

北風、からかぜ、寒いのに、

おちばの、おちばの子どもたち、

じゃんけんばらばら

かけていく。

からから、かけかけ、どこへいく。

おちばの、おちばの子どもたち、

ちよんちよんすずめと

どこへいく。

かきの秋

やまが、草屋ののきまでたれて、

かきはすずなり、

夕がらす。

ませにくびだす子うまの顔に、



かきはすずなり、
夕明かり。

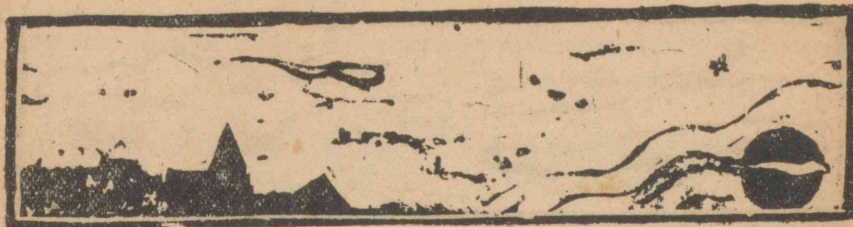
海

どこかでだれかがめくってる、
大きなきれいな一ページ、
生きた絵本の一ページ。
ふと、そんなこと思わせる、
あのまっさおな海の色。

書いても書いても書きたりぬ、
わたしの心の小人たち、
いつもでてくる小人たち。
ふと、そんなこと思わせる、
あのまっ白な波の音。

空のうた

うすむらさきにほのぼのと、
明かるくそまる朝の空。
楽しいことがあるような、



ああ、さわやかな朝の空。

すんだ青さをもちながら、

ときにはくもる晝の空。

考えごとでもできそうな、

ああ、おおらかな晝の空。

くらければこそ光る星、

ねむりをふらす夜の空。

きたないこともきえそうな、

ああ、おごそかな夜の空。

五 月と雲

月の明かるい晩でした。屋根も、木の葉も、石ころも、みんなきれいに光っていました。ふみおと、よしおと、みちこの三人が、かけふみをして遊んでいました。

そのうちに、あたりがきゅうにくらくなって、かげがみえなくなりました。三人は遊ぶのをやめて、空をみあげました。月は、雲にはいったかと思うとすぐで、でたかと思うとまたすぐはいります。

「お月さまが早く走っているね。」

と、よしおがいいました。

月はいま雲からでて、大いそぎではなれていきます。

そうして、つぎの雲の方へ
どンドン走っていきます。

けれども、じっと月をみ

つめていると、月は動かな

いで、雲が大いそぎでどん
でいくようにもみえます。

「お月さまじゃないわ。雲
が走っているのよ。」



と、みちこがいいました。

ふみおは、両方のいうことをきいていいました。

「よしおくんはお月さまが走っているといったね。みちこさ

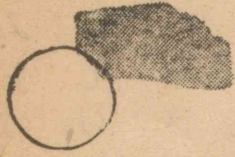
んは雲が走っているっていうの。」

「お月さまをじっとみていてごらん下さい。雲が大いそぎで
とんでいくでしょう。」

「でもね、雲をじっとみていてごらん。お月さまがずんずん

動いていくのがよくわかるよ。」

「へんだなあ。お月さまをみていると雲が動いて
いくし、雲をみているとお月さまが動いていく。
いったいどっちなんだろ。」



ふみおは、こういって、空をみあげました。

よしおとみちこが「月が走る。」雲が走る。」といいあっているのをききながら、ふみおはふしぎでたまりませんでした。

ふみおはふと気がついて、まえの方にある木の下へいきました。そうして、しばらく枝ごしに月をみていましたが、

「ここへきてごらん。ほら、よくわかるよ。」

と、手まねきをしました。

ふたりは木のそばへ走っていきました。

「ここに立って、お月さまを枝のあいだからみてごらん。」

ふたりはそのとおりにしてみました。すると、月は枝のあいだにじつとじています。雲はさっさと走っていきます。

よしおが大きな声をだしました。

「やっぱり雲が走っているんだね。」

「こうするとよくわかるのね。」

と、みちこも感心しました。

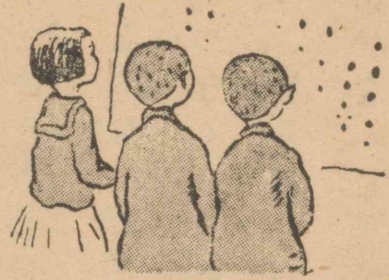
それから、三人はわかれて、それぞれ家へ帰りました。

ふみおがねるまえにそとをみると、空はいつのまにか、雲一つなく、きれいにはれわたっていました。ふみおはさっきのことを思いだして、また、にわの木の下へいってみました。動かないと思ってみた月は、もうさっきの枝のあいだにはななくて、木をすっとはずれてしまっていました。

六 かべ新聞

私の学級では、来週から、かべ新聞を発行することにしました。

かべ新聞第一号は、一組でつくることになりました。それから、二組、三組と、じゅん



じゅんにへんしゅうをすることに決めました。

私たち一組のものは、みんな集まって、どんなものにしようかといろいろ相談しました。手わけをして、やっとなつぎのようものができあがりました。

かべ新聞 第一号

はじめのことは

こんど私たちの学級で、かべ新聞を発行することになりました。

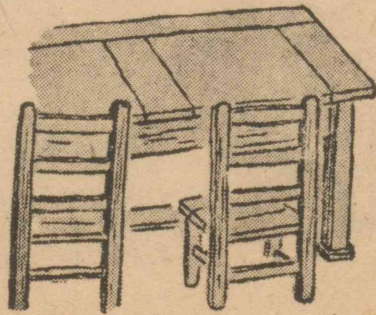
これには、みんなにお知らせしたいことを書きます。

みんなが喜ぶようなことを書きます。

みんなのしらべたことをはっぴょうします。

おもしろいことも、おかしいことも書きます。

どうぞ、みなさんの氣づいたことは、なん



でも、かかりのものにお知らせください。

「楽しい学級は、かべ新聞から。」



雪の朝

このあいだ雪の降った朝、一年生の子が、学校に行く道で、はき物に雪がついてころびました。そのひょうしに足をいためて、歩けなくなりました。そこを通りかかった人が、おんぶして学校までつれてきました。この人は、私たちの組のまつもとさんです。



七と五と

私は、きのう、おもしろいことに気がつきました。それはことばの声のかずのことです。うたうたは、なぜうたいやすいかと考えました。どうして、ふだんの話がうたえないいのかと考えました。そのわけがわかりました。うたうたは、そのことばの声のかずが、五か七になっているのです。

「空のうた」をしらべてみました。

ウスムラサキニ

ホノボノト ————— 五

アカルクソマル ————— 七

アサノソラ ————— 五

タノシイコトガ ————— 七

アルヨウナ ————— 五

アアサワヤカナ ————— 七

アサノソラ ————— 五

それから、まえにならったのを思いだして書いてみました。

カボチャノハナガ ————— 七

サキマシタ ————— 五

アンナトコロニ ————— 七

サキマシタ ————— 五

いろはがるたやことわざの中にも、このことのあるあてはまるものがみつかりました。

これがわかったとき、私はおもしろくてなりません。また、ふしぎでなりません。みなさん、ためしてみてください。(はらだ)

寒暖計



「子どもは風の子。」

けさの温度は五度です。毎朝、このらんにも、その日の朝の温度を書きつけましょう。

「ねこは、こたつでまるくなる。」



一口話

川が流れていました。

くつが流れてきました。そこへきゅうりが流れてきました。

きゅうりがくつの中にはいました。

「きゅうくつ、きゅうくつ。」

といました。



みじかい文

朝日の光で、

アルコールのびんが

きらっと光った。

アルコールは銀の水。

弟がせきがでるので、

おかあさんはゆたんぼをいれている。

わたしもせきがでたらいいなあ。

手をあらって、しゃぼんを水の上へおいたら、

つるつとすべった。

つかまえて、たなにあげたら、

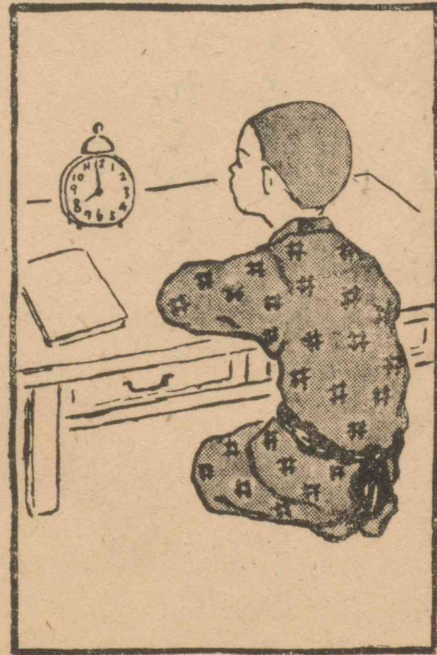
あぶくをだしておこった。

どうして、八時に
なると、

ねむくなるのだら
う。

どうしてだらう。

だれがねむくする
のだらう。(いしの)



な
ぞ



なあに。

一 世界じゅうで、いちばん力のつよいものは

二 上にすれば下になり、下にすれば上になるものはな
あに。

三 はたらくときはよこになり、休むときは立つものはな
あに。

このなぞの答がわかった人は、紙に書いてかへ新聞が
かりのものにだしてください。



つづき話

この第一号に、つづき話の第一かいめを書きます。
第二号をつくる人たちは、このお話のつづきを書いてくださ
い。

第三号をつくる人は、またそのつぎを書くのです。

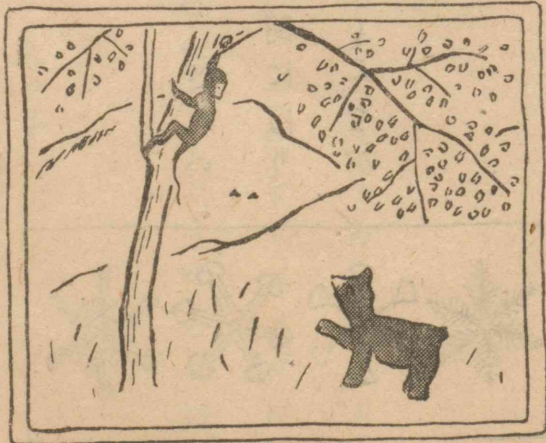
そのようにして、どこまでもお話をつづけてみましょう。ど
んなふうにお話がすすんでいくか、楽しみではありませんか。
お話の題はべつにきめませんから、かってにつぎを考えてく
ださい。

つづき話(第一かい)

あるところに、一ぴきの子ぐまが
住んでいました。お友だちと遊ぼう
と思つて、山の谷を歩いていきまし
た。すると、一ぴきのさるにであ
いました。

「さるさん、さるさん。遊びまし
う。」

と、子ぐまがいうと、さるは子ぐまをみてこわがって、
「きゃつ、きゃつ。」



と行って、木の上にするするとのぼって行ってしまいました。
子ぐまはまた歩いていきました。



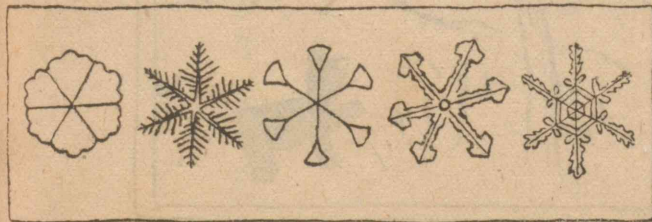
このほか、「雪のかたちを五つばかり、きれいに写生しました。それを切りとって新聞にはりつけました。それは、むしろがねでよくみながら書いたのです。

まんがもいれました。一組の人がみんなで考えてこしらえたまんがです。クロスワーズパズルもこしらえました。ことは遊びも書きました。

この学校の子どものかずや、一ばん遠くから通っている子どもの名や家の場所も書きました。

かべ新聞の大きさは、わら半紙を四まいはりあわせたものです。そんなに大きくはありませんが、これをじょうずにくぎって、きれいに、むだのないようにへんしゅうするのは、むずかしいことでした。

第二号がどんなふうになるか、楽しみです。





七 だれの力

ごろうは、妹のはるえといっしょになつて、大きな雪だるまを作りました。目も、

はなも、口もつけました。

「にいさん、この雪だるま、歩きだしそうね。」

「ほんとに歩くとおもしろいな。」

「お話もしたら、なおおもしろいわねえ。」

「雪だるま、どんなお話をするだろう。」

そこへ、中学校に通っているねえさんが、帰ってきました。

「まあ、よくできたのね。」

「いま、この雪だるまが、お話をすればいいって、いっていたところよ。」

これをきいて、ねえさんはわらいました。

「口があるから、お話もするかもしれないよ。」

「でも、こんな口じゃ、だめだわ。」

と、はるえは本氣になっていきました。

はるえは、まえに「こくごでならったよみかき」のところを、ふと思いだしました。

「そうね。はるえさんのいうとおりね。雪だるまはお話はしないけれども、はるえさんが、なにかお話をしてあげたら

どう。

「たるまさんのうたをつくって、うたってあげようか。」

「雪だるま、きつと喜びますよ。」

その日、晩ごはんをたべながら、ごろうはこんなことを考えました。

「いったい、あの雪だるまは、死んでいるのか、生きているのか。もちろん生きているとは思わないが、死んでいるとも思えない。死んでいたら、ころがってたおれるわけだし、目だってつぶってしまುದろうし、あんなに元氣のいい顔つきもしていかないはずだ——」

「ごろう、なにを考えこんでいるんだね。」

おとうさんにたずねられて、

「雪だるまのことです。」

と、とんでもない話をもちだしたので、みんながわらいました。

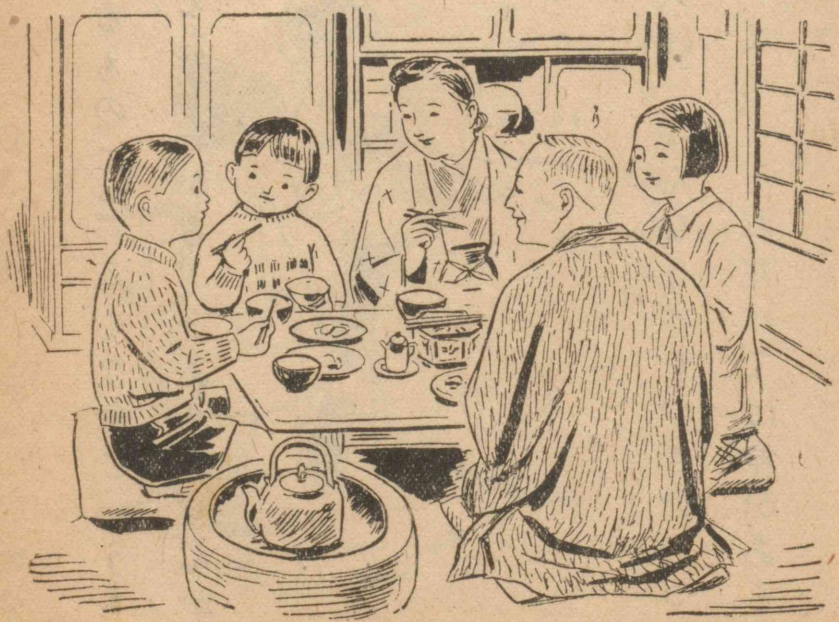
「ね、おとうさん。雪だるま

は生きているのでしょいか、

死んでいるのでしょいか。」

「さ、どっちかな。」

「ぼく、どっちだかわからなくなっちゃった。」



おかあさんが、

「ねえ、ごろうさん。生きているものには、みんな命というものがありますよ。それを考えたらわかるじゃありませんか。」とおっしゃいました。

「命って、動くものでしょうか。」

「動きますとも。」

「風なんかも。」

「あれはちがいますよ。」

「汽車は。」自動車は。「雪は。」火は。こんなことをつぎからつぎへと考えました。たとえ動いても、それだけでは命があるとはいえないと、ごろうは思いつきました。

あくる朝、おとうさんから、

「どうだ、ゆうべの命のこと、わかったかい。」

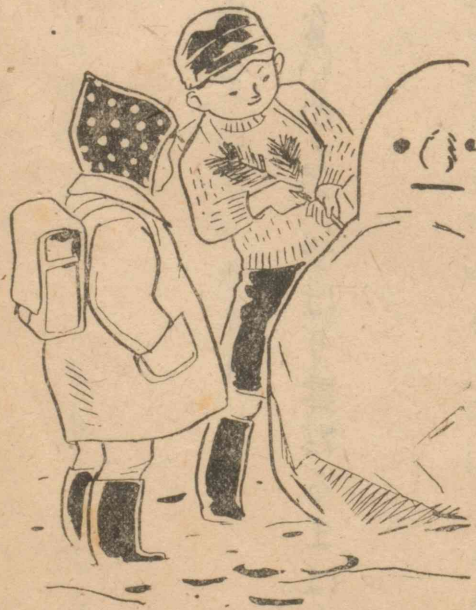
ときかれて、ごろうは、

「まだけんとうがつかいません。」

と答えました。

「だいいち、おまえが生きているんだから、わかりそうなものだがな。」

学校へいくとき、雪だるまのかわこのところに、まつの枝を



つけました。

はるえはそれを見て、

「にいさん、これなあに。」

とききました。ごろうは、

「手だよ。」

・
といいながら、この手が動かないから、やはり雪だるまは命がないのかなど思いました。

ごろうが学校で、

「先生、ぼくたちは動いたり息をしたりするから、生きてい
るんでしょう。」

「なんだい、ごろうくんは。きゅうにそんなことをきいたり

して。」

「きのうから、それを考えているんです。ぼくたちは、だん
だん大きくなるから、生きていくんでしょう。」

「たしかに、動いたり大きくなったりしているものは、みんな
な生きものだね。」

「雪だるまは動きもしないし、息もしていませんね。」

「雪だるま、雪だるまは生きものではないからね。」

「わかった、わかった。」

いぬは動くし、いきをするから命がある。うしろまもそ
うだ。風や、自動車や、水車は、動いていても息をしないか
ら、命がないんだと、ごろうは考えつきました。

その夜、ごろうはおとうさんに、この考えついたことを話しました。すると、おとうさんは、

「よく考えた。命のあるものは、日に日にそだっていく。たとえ動かない木でも、草でも、命をもっているのだよ。とにかく、命のことはむずかしい大きな問題だね。」

とおっしゃいました。そばからねえさんが、

「ごろうさん、あなたは、ねむってしまったら動かなくなるでしょう。けれども、息はするでしょう。だれがそうさせるのかしら。」

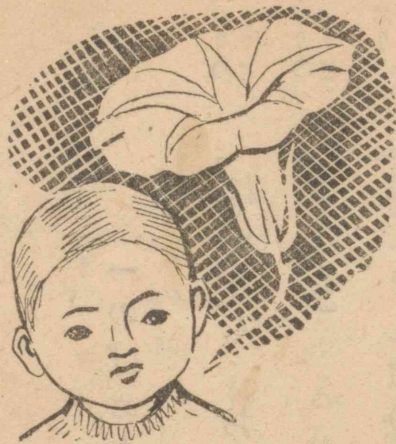
といました。

ごろうは、息をすることも自分の力ではないことをきいて、なるほどと思いました。

「息ばかりではありませんよ。ほら、左のむねのところを手をあててごらんなさい。どきんどきんやっているでしょう。

しんぞうのこどうですよ。あなたが、それを動かそうと思って動かしているの。ちがうでしょう。息と同じように、あなたがねむっているときも、どきんどきんやっていますよ。」

ごろうは、いつか「こくご」でならった「あさがおの花を思いだしました。そうして、自分とあさがおの花とが、たいへん近いもののように思われました。」



八 つりばりのゆくえ

一のばめん

「ほおりの
みこと
にいさん、お願いがあります。」

「ほおりの
みこと
なんだ。」

「ほおりの
みこと
にいさんは毎日海へでて、魚をとっていらっしゃるが、私は毎日山へいって、鳥やけものをとっていますね。」

「ほおりの
みこと
そうだ。それがどうした。」

「ほおりの
みこと
「お願いがあるのです。」

「ほおりの
みこと
「どういうことだ。」

「ほおりの
みこと
「きょう一日だけ、私

につりをさせてくだ

さいませんか。その

かわり、にいさんは

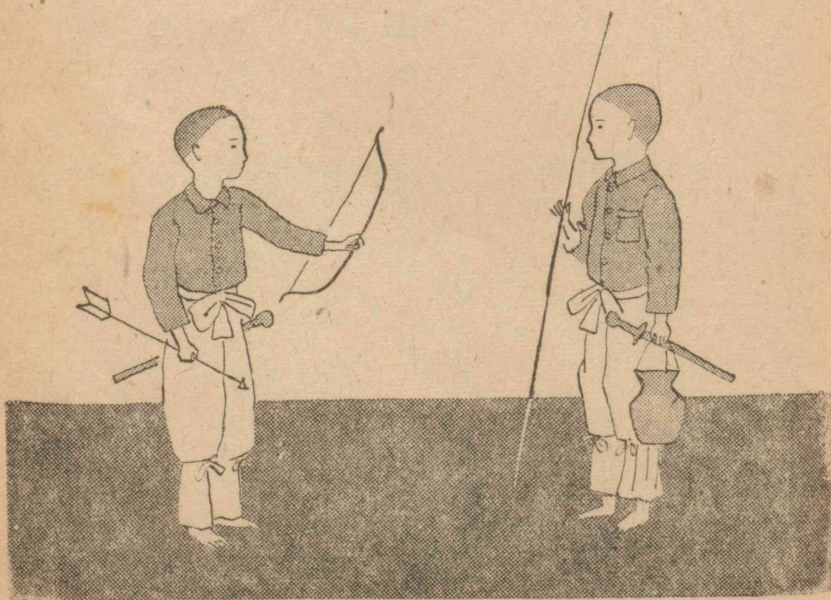
山へいらっしゃって。」

「そんなこと、いやだ

よ。」

「ほおりの
みこと
「たった一日だけでい

いのです。」

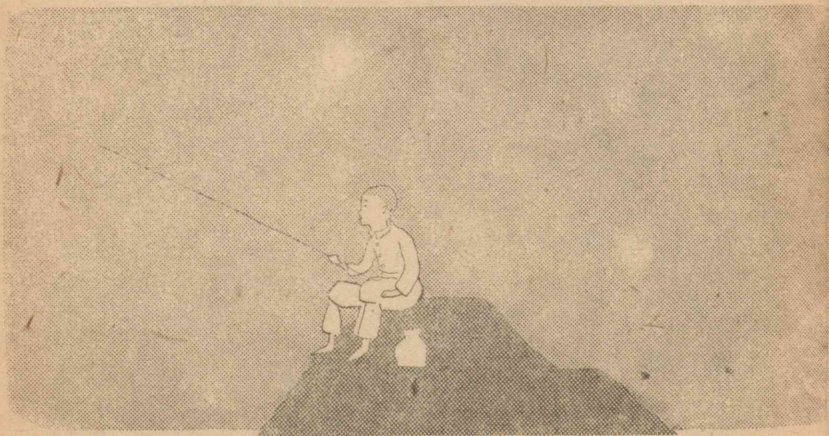


「いくら一日でも、いやだ。」
 「一どつりがしたいのです。」
 「そんなにつりがしたいのか。」
 「あの大きなたいをつつてみたいのです。」
 「そううまくつれるものではないよ。でも、つつてみるがいいさ。わたしは山へいこう。」
 「ほんとう、にいさん。」
 「このつりざおを持っていくがいい。」
 「ありがどう、にいさん。にいさんはこの弓と矢を持っていらっしやい。」

二のばめん

「どうしてつれないのだらう。朝から一びきもつれないなんて——」
 おや、ひく、ひく。ぐいぐいひくぞ。大きな魚らしい。ひきあげてみよう。よいしょ。

ほおりのみことはつりざおをひきあげる。糸がぶつつりと切れ



て、
魚はにげる。
みほりの
みこと

「しまった。大きいのをにがした。
あ、つりばりをとられた。どうしよう。困ったな。」

三のばめん

みほりの
みこと

「おもしろくなかった。小鳥一わとれやしな。さ、
弓矢を返すよ。」

みほりの
みこと

「にさんもやっぱりえものがなかったんですか。」

みほりの
みこと

「おまえは、なにかつったか。」

みほりの
みこと

「いいえ、つれませんでした。つれないどころか、申

しわけのないことをしてしまいました。」

みほりの
みこと

「どうしたのだ。」

みほりの
みこと

「つりばりを魚にとられ
てしまいました。」

「とられたって。」

「はい。」

「」

みほりの
みこと

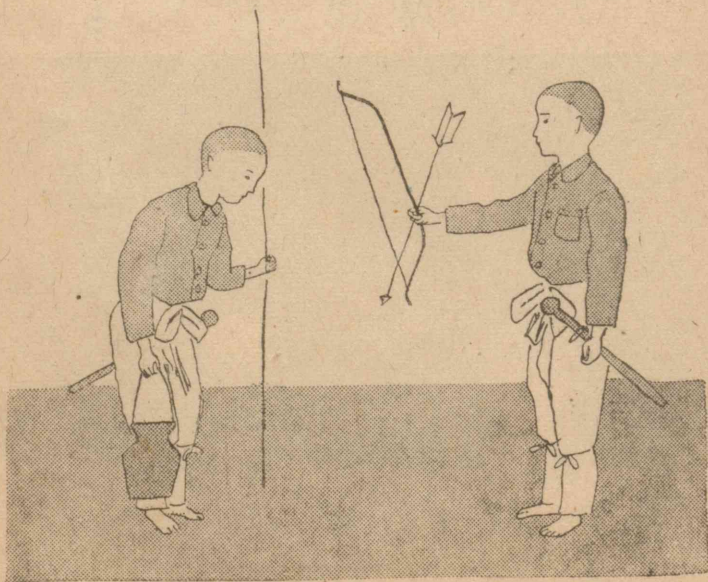
「申しわけがありません。」

「どんなことでもして、

「おわびいたします。」

みほりの
みこと

「だいじなつりばりをなくしてしまうなんて。おまえ



ほおりの
みこと

「からいいだしておいて。」

「にいさん、ゆるしてく
ださい。」

ほてりの
みこと

「いや、ゆるすことはで
きない。」

四のばめん

ほおりのみことは、海べでな
いっている。そこへひとりの年
よりがでてくる。

年より 「もしもし、あなたは、どうしてないていらっしやる
のですか。」

ほおりの
みこと

「つりばりは魚にとられてしまっし、にいさんにはし
かられるし、困ってないていたのです。」

年より

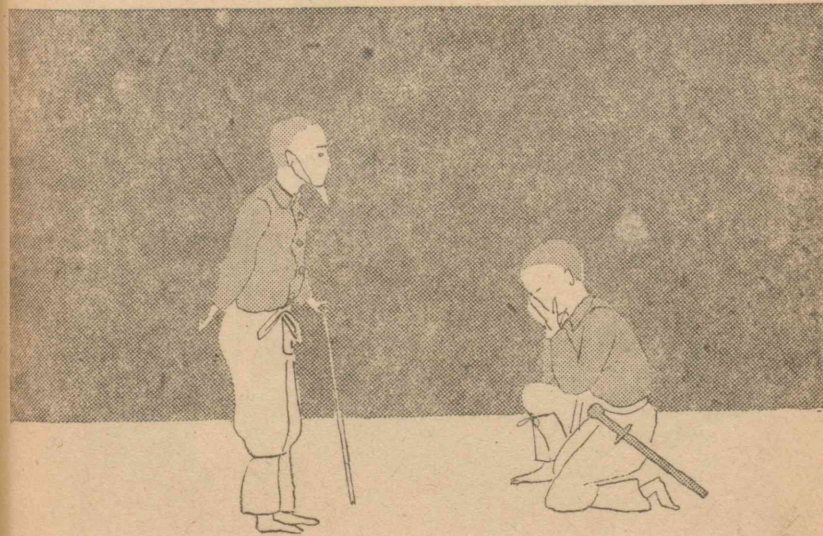
「では、私がいいことを教えてあげましよう。そこに
船がある。あれにお乗りなさい。まもなく、きれい
なごてんにつくでしよう。」

ほおりの
みこと

「なんのごてんですか。」

年より

「海のごてんです。そのごてんの門のそばにいと
があつて、そのそばには、大きな木が立っています。
あなたは、その大きな木にのぼつて、まっぴらっ



「しゃい。」

ほおりの
みこと

「木にのぼるのですか。」

年より

「そうです。すると、海の神は、きつといいことを教
えてくださるでしょう。さあ、早く船にお乗りなさ
い。おしてあげますから。」

五のばめん

海のごてんの門のまえに、大きな木が立っている。

ほおりのみことは、木をみあげて、

ほおりの
みこと

「ははあ、この木だな。のぼってみよう。」

木にのぼって、下をみる。

ほおりの
みこと

「おや、あんなところ
にいどがある。きれ
いな水だな。」

そこへ女の人が出てきて、

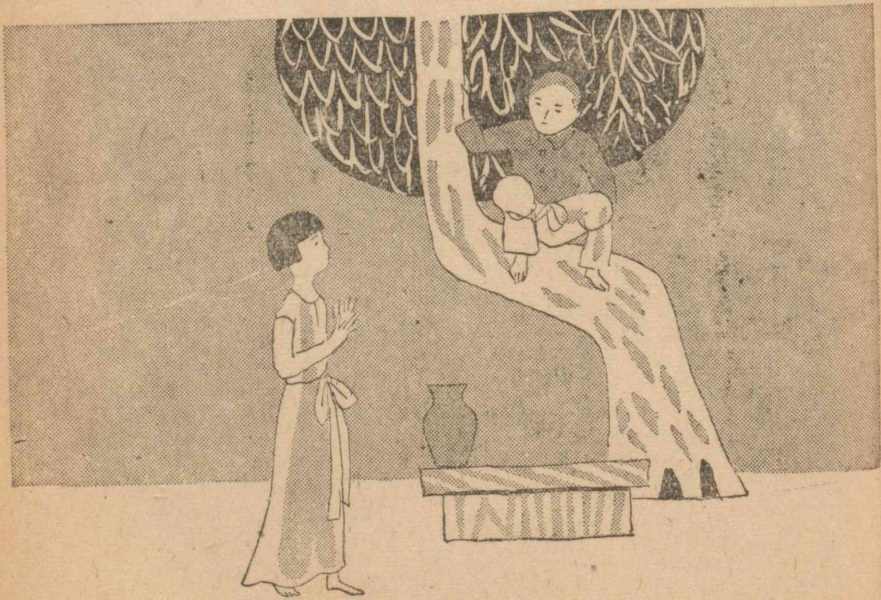
いどの水をくもうとする。

いどの水をみて、

女

「まあ、りっぱなかた
が、水にうつってい
るわ。」

女の方は木をみあげなが



ら、おじぎをする。

ほおりの
みこと 「すみませんが、そのいどの水を一ぱいください。」

女 「はい。」

女の人、水をくんで、ほおりのみことにさしあげる。

ほおりのみことは、ぐっとおのみになつて

ほおりの
みこと 「ああ、おいしい水。ごちそうさま。」

六のばめん

正面に、海の神がこしをかけていらつしやる。

そこへ、さっきの女の人が出てくる。

女 「海の神さまに、申しあげます。」

海の神 「なんだね。」

女 「門の木の上に、りっぱなかたがいらつしやいます。」

海の神 「木の上に、りっぱなかたが。」

女 「さようでございます。」

海の神 「では、そのかたをこちらへごあんないしなさい。」

女の人、いったんさがる。まもなく、ほおりのみことを

あんないしてでてくる。

海の神 「さあ、どうぞこちらへ。」

ほおりのみことは、こしをかける。

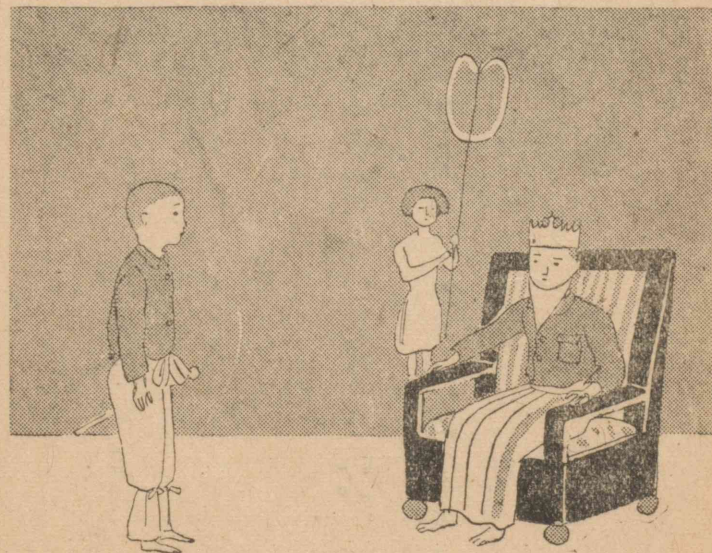
海の神 「あなたは、どなたでいらつしやいますか。」

ほおりの
みこと
海の神

「私は、ほでりのみことの弟、ほおりのみことです。
「あ、さようでございま
したか。なにかご用で
ございましょうか。
「じつは、海でつりをし
ていたら、つりばりを
とられてしまったので
す。」

ほおりの
みこと
海の神

「つりばりを。
「そうです。兄のだいじ
なつりばりなので、私も困ってしまいました。そこ
へ年をとったかたがあらわれて、私に海のごてんへ
いくようにと教えてくださいました。それで、いま
ここへやってきたところです。」



海の神

「それでしたか。それはお困りでしょう。では、さっ
そくさがさせてみましょう。」

女の人に向かって、

海の神

「魚どもを、みんなここへよび集めるように。」

女

「はい。」

女の方は、魚たちをたくさんつれてでてくる。

女

「魚どもをよんでまいりました。」

海の神

「これでみんなか。」

女

「はい。たいだけは、病
氣でねておりますの
で、ここへはまいっ
ておりません。」

海の神

「そうか。みなのもの
にたずねるが、だれ
か、このかたのつり
ばりをとっていった
ものはないか。」

魚一

「ぞんじません。」

魚二

「とりません。」

魚三

「ちっともぞんじませ
ん。」

海の神

「それはおかしい。い
や、たしかにあるは
ずだ。だれか知って
いるものはないか。」

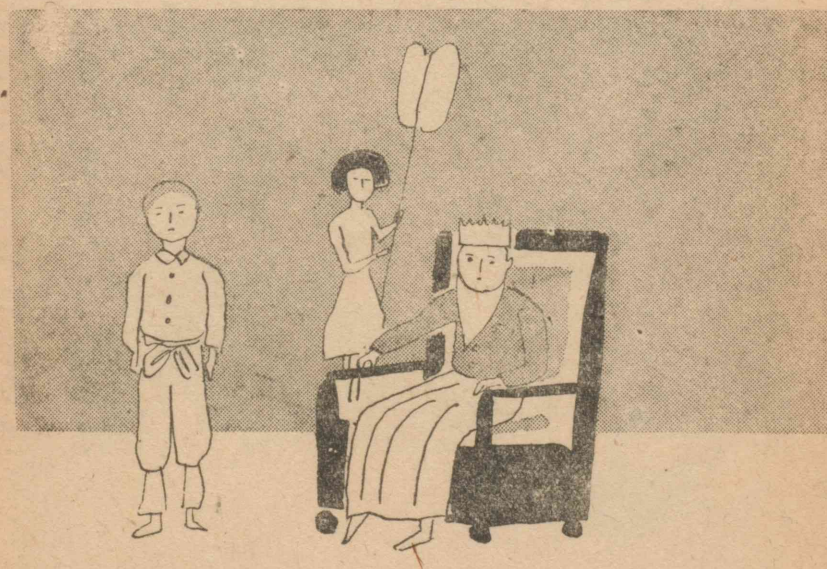
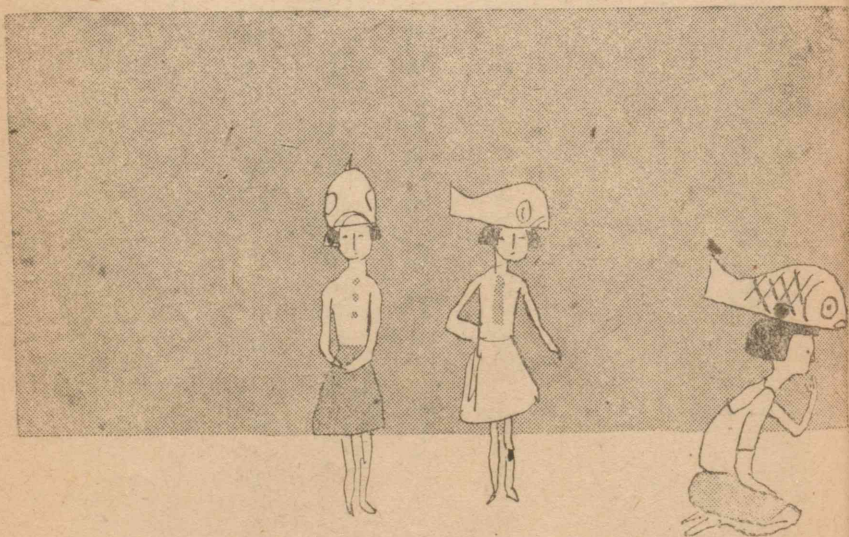
魚たち

「ほんとうです。」

海の神

「おかしいな。」

海の神は、しばらくお考
えになって、女の人に、
「それでは、たいをち



「よつとここへよんできてくれないか。」

女

「はい。」

女の人へ、たいをつれてでてくる。

た い 「なにかご用でございましょうか。」

海の神 「おまえは、このかたのつりばりを知らないか。」

た い 「このあいだから、つりばりをのどにかけまして、 た

いへん苦しんでいるところでございます。」

海の神 「あ、それにちがない。」

女の人に向かって、

海の神 「たいののどから、つりばりをとっておやり。」

女

「はい。」

つりばりをとる。

た い 「あ、これですっかりらしくなりました。」

女の人へつりばりを水であらって、海の神にさしあげる。

海の神 「たしかにつりばりだ。」

海の神は、ほおりのみことのまえにさしだしながら、

海の神 「このつりばりではございせんか。」

ほおりのみこと 「あ、これだ。これです。」

海の神 「みつかって、ほんとうによろしゅうございました。」

ほおりのみこと 「ありがとうございます。みなさん、ありがとうございます。」

魚たちが合唱をする。みことは、それにあわせておどりを
おどる。

だいなだいなつりばりが、
でてきて神さまお喜び。

いたい、いたいとないていた、
たいも喜び、おめでたい。

めでた、めでたとさかなたち、
みんなてまうやら、うたうやら。

九 ぼくの発見

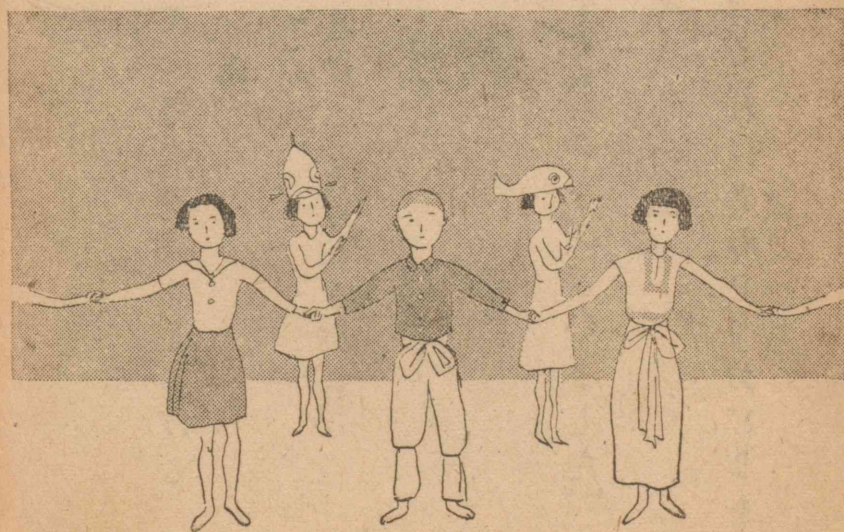
(一)

つくえのひきだしをかたづけしていると、いつか、おじいさん
にいたたたいた古いめがねのたまど、おとうさんにかつてい
ただいた小さな虫めがねがでてきた。

「これは、いいものがみつかった。」と思ひながら、ぼくは、
この二つをかさねたりべつべつにしたりして、つくえの上を
みたりそとのけしきをのぞいたりしていた。

そのうちに、ふと、おもしろいことを発見した。

左の手に、めがねのたまを持って、目から遠くはなした。



すると、向こうのけしきが、小さく、さかさまにみえた。そのさかさまにみえるけしきを、大きくしてみようと思って、右の手に虫めがねを持って、のぞいてみた。どこかの屋根が、めがねのたまいっばいにひろがって、ついそこにあるようにみえるではないか。それは、ここから百メートルもはなれている、向こうの家の屋根であった。



きるかもしれない。

「これで、いつか、おとうさんのお話にきいた望遠鏡が、できよう。こころをきいて、ぼくは、もう、じっとしていられなくなつた。」

ぼくは画用紙をとりだした。そうして、その一まいをぐるぐるとまいた。ちょうど、めがねのたまがはまるくらいの大きさにまいて、その一方のはしに、めがねのたまをはめた。きちんとはまったとき、まいた紙を糸できりきりとまいて、動かないようにした。これで、一本のつつができあがった。つぎに、もう一まいの画用紙を、ぐるぐるとまいた。そうして、さっきのつつの中へ、ちょうど、するすとはいるくらいの大きさに作って、そのはしに、虫めがねをとりつけた。

こうしてできた二本のつつは、うまくはまりあって、長くのばしたりちぢめたりすることが出来る。

「さあ、できたぞ。うまくみえるかしら。」

ぼくはこうひとりごとをいいながら、そとをのぞいてみた。長い物がぼんやりみえる。二つのつつをのばしたりちぢめたり、かげんしているうちに、はっきりした。

電柱だ。はりがねが六本あることまでわかる。

もっと下をみる。屋根だ。しょうじだ。おや、だれかが、しょうじのあいだから顔をだしている。いそいで、おかあさんのところへいった。

「おかあさん、きてごらんなさい。早く。早く。」

おかあさんは、目をまるくして、

「なんです、まさおさん。大き

な声をして。」

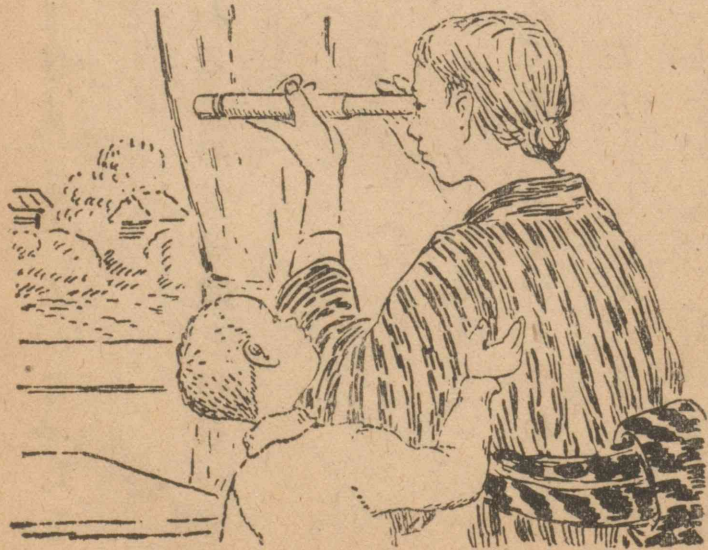
「なんでもいいから、きてくだ

さい。」

ぼくは、おかあさんをひっぱるようにして、つれてきた。そうして、ぼくの望遠鏡をのぞいてもらった。

「まあ、よくみえるね。でも、

さかさまじゃないの。」



「さかさまでも、よくみえるでしょう。」
「向こうの家のせんとく物もみえますよ。あ、人がこっちを
みている。森の木のきれいなこと。」
ぼくとおかあさんは、かわるがわるこの望遠鏡をのぞいて
楽しんだ。

(二)

弟は、二三日まえから、かぜぎみである。しかし、ねつは
ないので、ねているわけではない。ただ、はながつまってい
るだけだが、そのために発音がすこしおかしい。「あのねえ」と
いうのが、「アドデエ」ときこえる。「にいさん」というのは、「リイ

サン」のようだ。

さつきも、「紙をちょうだい。」

というのが、「カビヲチヨウダイ。」

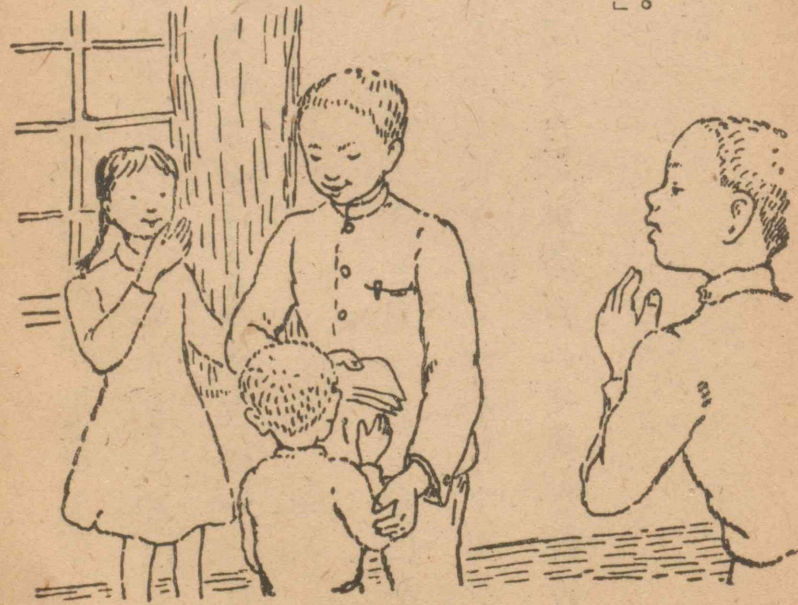
ときこえたので、「にいさんが、

「ハダヲカブノカイ。」

といて、みんなで大わらいを
した。弟のことばをまねて、「は
なをかむのかい。」といったので
ある。

ぼくも、もちろんならった。

そうして、にいさんのまねのう



まいのに感心した。弟は、まえに、「はなをかむ」ということばを、そのようにいったことがあるのではない。しかし、「ハダヲカブ」というのが、いかにも弟のいいそうなことばつきである。その、弟がまだいわないことばを、さきにいったから感心したのである。

そこで、ぼくもひとつまねをしてやろうと思った。なにかよいおりはないかと思っていたら、ちょうど、空からブルン、ブルンというばくおんがきこえてきた。弟のだいすきな飛行機である。ぼくは、ここだと思って、

「あつ、ビゴウキダ。」

といった。いってから、すこしふしぜんだなと思った。みんなもあまりわらってくれない。弟が、

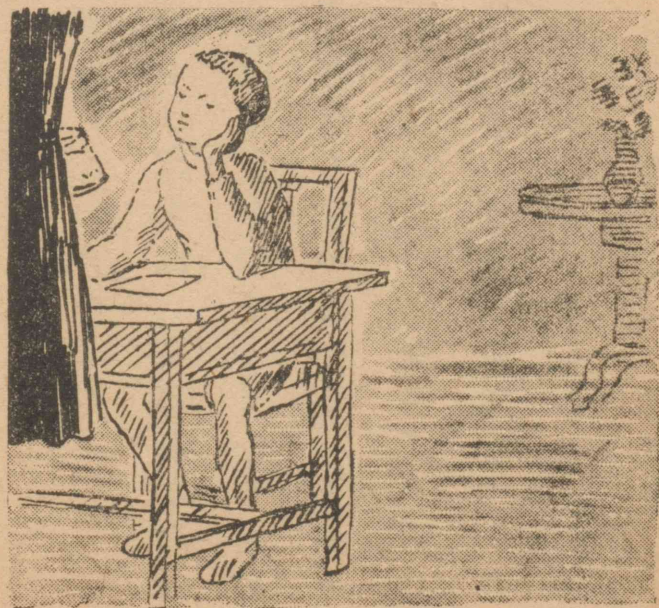
「飛行機なら、ちゃんと、ヒコーキといえるよ。」

といたので、みんなは、これで大わらいとなった。

ぼくのまねはしくじった。しかし、ぼくは、このおかげで、おもしろいことに気がついた。弟ははながつまっているために、あることばが、うまく発音できなくなっている。しかし、どんなことばでも発音できないわけではない。発音できることばと、できないことばとがある、ということに気がついたのである。

ぼくは、夜、勉強をすましてから、ひとりで、なぜはながつまるといえなくなることばと、はながつまってもいえるこ

とばとがあるのだから、と考えてみた。そのわけは、すぐけんとうがついた。はながつまつたために発音ができなくなるような音は、もともとはなから声のでるような音にちがいない。そうして、はながつまっても発音できるような音は、はなから声のでない音のはずである。ぼくは、いままで、ものをいうときに、声はなからでるかでないかということ、考えたことがなかった。これはおもしろ



いぞとぼくは思った。

では、なんという音が、はなから声のでる音なのだろうか。弟は、「はなの「ナ」、あのねの「ノ」と「ネ」、に「い」さんの「ニ」、紙の「ミ」、かむの「ム」がいいにくいらしい。すると、これらははなからでる音なのだろう。そう思って、「ナ」「ノ」「ネ」「ニ」「ミ」「ム」と自分で声をだして試してみると、いかにもはなから声のでているような気がする。そこでぼくは、自分ではなをつまんで、はなのあなから息がもれないようにして、「ナ」「ノ」「ネ」「ニ」「ミ」「ム」と試してみた。苦しい。はなから声のでる音であることはたしかとなった。自分ではなをつまんで、「ナ」といいながら、耳で試してみると、まるで「ダ」というようだ。弟は、

こんなふうにして、「はな」といっているんだと思うと、きゅうにおかしくなった。これなら、弟のまねなんかわけはないぞと思った。なんでも、「ナ」や「ノ」のつくことばがあったら、「ダ」や「ド」にいいかえればいいわけだ。ためしに、「なんだ」というかわりに、「ダнда」といってみると、いかにも弟のいいかたそっくりになった。それでぼくは、思わず声をたててわらってしまった。

よし、あしたはうまくやって、みんなをわらわせてみせるぞと思ったが、そのとき、新しいことがあたまにうかんだので、もうそんなことはどうでもよくなってしまった。弟がいない音の中で、「ナ」、「ノ」、「ネ」、「ニ」は、みんなアイウエオ、カ

キクケコ——という五十音の中で、ナニヌネノという一ぎょうの中にはいっている音ばかりではないか。ただ一つ「ヌ」という音がぬけているだけである。

そこで、あらためて声をだして「ヌ」といってみた。

これもはなから声がぬけているようだ。ねんのために、はなをつまんで、「ヌ」といおうとしたら、じつに苦しい。そうすると、

ナニヌネノという一ぎょうは、ぜんぶはなの音でできている



ことがわかった。

このほかに、弟は「ミ」、「ム」がいえなかった。この二つは、両方とも、マミムメモという一ぎょうの中にはいつている。ここで、もしやと思つて、はなをつまんで「マ」、「メ」、「モ」といつてみたら、これらもはなの音であることがわかった。そうして、こんどは、アイウエオ、カキクケコから、じゅんじゅんにいつてみたところが、ふしぎふしぎ、はなからでる音は、ナニヌネノ、マミムメモの二ぎょうだけで、あとは、おしまいのバビブベボ、パビブベボにいたるまで、みんなはなから声のでる音ではないことがわかった。

ぼくは、五十音というものは、一年生のときにならったからよく知っているが、いままでは、「ちがったかなをならべたもの」ぐらいに思つて、それ以上ふかく考えてみたことはなかった。それがいま、一つ一つの音の性質を考えたうえで作つたものであることがわかつて、びっくりしてしまった。カキクケコでも、サシスセソでも、かんたんにはわからないが、一ぎょう一ぎょうは、なにか、ほかのぎょうとはちがった性質をもっているにちがいない。

ぼくは、こう考えると、弟のまねをしてみんなをわらわせてやろうなどという氣持は、どこかへふっとんでしまった。それよりも、五十音について、新しく思いついたことをみんなに話して、びっくりさせてやろうと考えたからである。

十 たこ

おじさんからたこをいただきました。ま四角で、骨が二本しかついでいたたこです。

はじめてあげにいったときに、みんなが、

「へんなたこだな。こんなものがあがるものか。」

どいってわらいました。けれども、あげてみると、なかなかよくあがりました。だれのたこよりもよくあがりました。わる口をいったものも、

「やあ、よくあがる。ふしぎだなあ。」

どいって感心しました。

ただしちゃんが、そばから、

「ちよつと糸を持たせて。」

どいしました。ただしちゃんは、海外からひきあげてきた子で、來年小学校へあがります。糸を持ったただしちゃんは、

「よくひっぱるな。」

どいってにこにこしました。たこが青空で右や左にゆれると、自分もいっしょに首をふりながら、しっかり糸をにぎっています。

「こんなたこ、ほしいなあ。」

ど、ただしちゃんがいました。ほんとうにほしそうな口ぶ

りなので、

「作ってあげようか。」

といますと、ただしちゃん喜んで、

「うん、作って。」

と、元氣のいい声でいいました。

たろうさんが、わきから、

「きみ、作れるかい。」

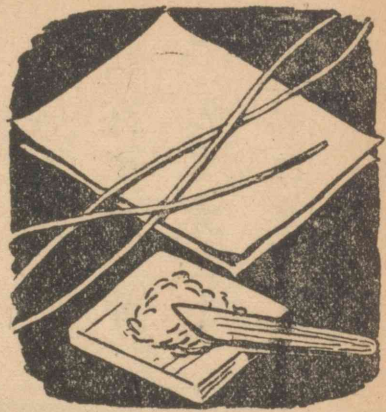
とききました。

「作れるさ。」

と答えましたが、ほんとうは、たこを作るのははじめてです。けれども、いっしょうけんめいに作ったら、できないことはない

ないだろうと思いました。

うちへ帰って、そのたこをみて、作りかたを考えてみました。材料は、ま四角な紙と、骨にするほそい竹二本と、それに、たこ糸やのりなどです。紙は半紙で



いいし、骨は工作のあまりのひごでまにあわせました。のりは、ごはんつぶをよくねると、いいのりができました。

はじめに半紙をま四角に切りました。なが四角から、ま四角に切る切りかたは、いつかおかあさんに教えていただきましたから、うまくできました。

「なんの絵をかこうか。」と、いろいろ考えましたが、ただし

ちゃんのわらい顔をかくことにしました。

クレヨンで色をつけ、バックをむらさき色にぬりつぶしたら、ただしちゃん
の顔が、生き
生きとうきあがっ
てきました。

つぎに骨のと
りつけです。骨
は、たて骨とよ
こ骨の二本です。



まず、たて骨からはじめました。紙のうらには、まん中に、
ま四角に切ったときにつけたすじがたてについています。そ
のすじにあわせてひごを切り、小さな紙で上と下とまん中を
はりつけました。

それから、よこ骨。よこ骨はまっすぐではなく、上へ弓な
りにまげるのですから、めんどうでした。じっさいに紙の上
でいろいろとまげぐあいをしらべ、ちょうどいい長さにひご
を切りました。はりつけるのも、まがっているのでめんどう
でしたが、いろいろにくふうして、うまくはりつけました。
やっとできたので、おかってにいらっしゃるおかあさんの
ところへとんでいって、

「やっとできましたよ。」

とっておみせしました。おかあさんは、

「まあ、よくできましたね。」

と、ほめてくださいました。

「これ、ただしちゃんにあげるの。」

「ただしちゃん、大喜びでしょう。でも、のりがかわかない
うちにあまりいじると、すぐはがれますよ。そうつとかわ
かしておおきなさい。」

ぼくは、だいじに本ばこの上に乗せておきました。

「早くかわくといいな。かわいたら、糸目をつけて、ただし
ちゃんのところへ持って行ってあげるんだ。」

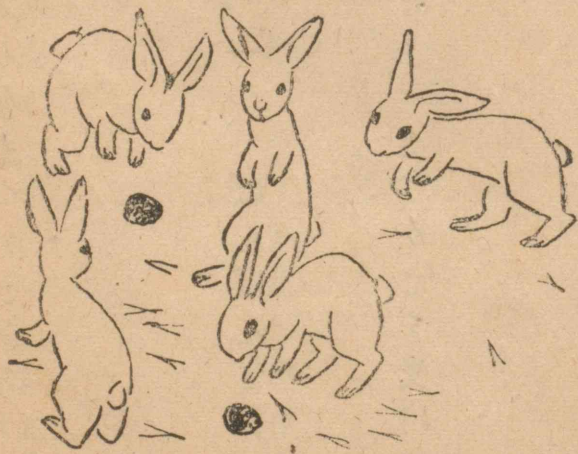
ぼくは、うれしくてたまりませんでした。

十一 うさぎさん

五ひきのうさぎさんがいまし
た。

ある日のこと、五ひきのうさ
ぎさんは、まつ林の中で、まつ
かさて、まりなげをしたり、フッ
トボールをしたりして遊びまし
た。

そこへ、おさるさんがやってきました。



「うさぎさん、そのまつかさをくれなにか。」

うさぎさんたちは、おさるさんにみんなまつかさをあげよ
うと、話しあいました。

「あげるよ。お受けなさい。」

うさぎさんたちは、まつかさを一つ一つ、ぽんぽんとおさ
るさんになげてやりました。
おさるさんは、きよろきよろしながら、まつかさを受けと
りました。

うさぎさんたちは、くるみの木の下で遊びました。そこに
は、くるみの実が、ころころと落ちていました。

うさぎさんは、くるみをひろって、石でわってたべること
にしました。

「このくるみを持って行って。」

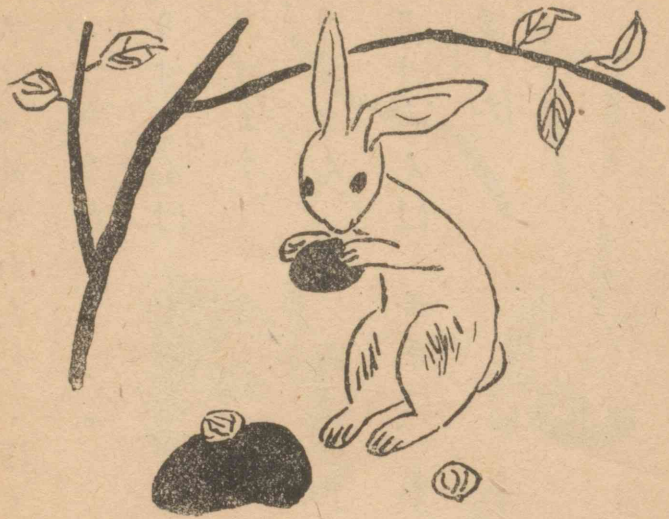
山のとっぺんでたべよう。」

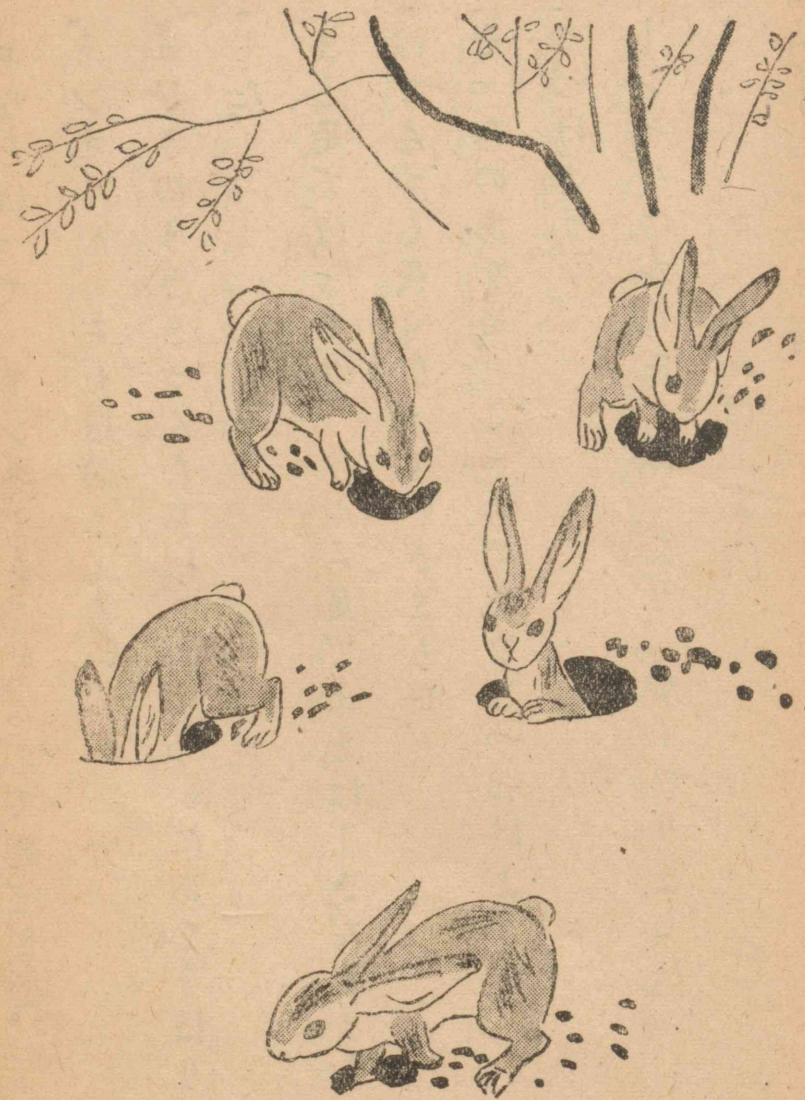
そういいながら、カチン、カ
チンとわっていると、そこへちよ
ろちよると、りすさんがきまし
た。

「うさぎさん、なにしているの。」

「くるみをわっているんだよ。」

「かたくて、うまくわれないだらう。」





「こんどは、なにをしようか。」

べました。

「りすさんは、両手に、くるみをにぎって、おいしそうにた

「あげよう。さ、あげるよ。おあがり。」

「あげよう。」

「りすさんは、くるみがだいすきだそうだから、あげようか。」

「いすきなんだ。」

「たくさんとれたね。ぼくにもちょうだい。ぼく、くるみだ

「石でたたいて、わっているのさ。」

「あなをほって、トンネルをこしらえて遊ぼうよ。」

「トンネルか。それはおもしろい。」

五ひきのうさぎさんたちは、めいめいにあなをほりはじめました。

まえ足でほってほ、うしろ足で土をはじきだしました。あなはずんずん長くなっていきました。

「そっちのあなど、こっちのあなどつづけようか。」

「つづけよう。」

トンネルはだんだん深くなり、廣くなりました。

「ここで、かくれんぼしよう。」

「しよう、しよう。」

「じゃんけんぽん。」

「あいこでしょ。」

五ひきのうさぎさんたちは、大きな声でじゃんけんをして、

おにをきめました。

おにが、目をつぶって、

「もう、いいかい。」

とさけびました。四ひきのうさぎさんたちは、とんとこ、とんとことトンネルの中を走っていきました。

「もう、いいかい。」

「」

「もう、いいかい。」

「もう、いいよ。」

おにも、とんとこ、とんとことさがしにでかけました。おにの足音をきいて、四ひきのうさぎさんたちは、うまくにげました。おにがあちらからくると、こちらへかくれ、こちらからまわっていくと、みんなはあちらへこっそりわたりました。

かくれているうさぎさんたちは、おかしいのをがまんしながら、「グック、クック。」といて、うまくにげました。

ところが、一ぴきのうさぎさんが、あわててにげたので、トンネルのさか道に足をすべらせて、ころころと 下の方へころがりこんでいきました。

「みつけた。」

新しいおにがきまって、またはじめようとしたとき、トンネルの入口のところ、だれかの声がします。それはたぬきさんでした。たぬきさんは毛をぬらしてなにかあわてています。

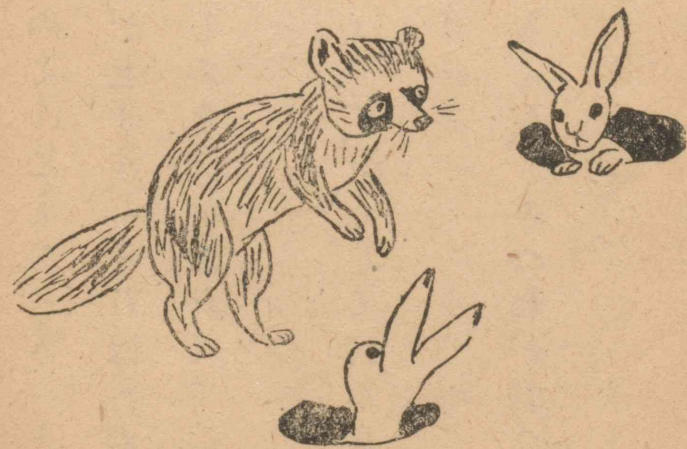
「うさぎさん、かくしておくれ。ちょっとかくしておくれ。」

「どうしたの、たぬきさん。」

「いま、きつねに追いかけてるんだ。きつねがおこつて、追いかけてくるんだよ。」

「きみたちが、ここでわいわいやつていては、すぐぼくが、」

きつねにみつかってしまふから、どこかへいってくれたまえ。ぼくひとり、じっとしずかにしていたんだよ。
たぬきさんが、ま顔になっていうので、うさぎさんたちは、たぬきさんがかわいそうになりました。



うさぎさんたちは、そのまま向こうのやぶの方へいってしまいました。

それを見て、たぬきさんは、「あははは。と、大声でわらいました。

「うさぎたちは、なんてひどがいいんだらう。ぼくはきつねに追われてなんかいやしないんだ。このトンネルがほしかったのさ。このあたたかいトンネルで、今夜、ゆっくりとねむりたかったのさ。」

うさぎさんたちは、大きなけやきの下で、まるくならんで話をしました。

「こんどはなにをして遊ぼう。」
「かけっこだ。」

「よし、やろう。」

かけっこは、うさぎさんたちのおとくいです。

「決勝点は、あの山のとっぺんにしよう。いいかい。」

「いいとも。」

「ようい。」

「どん。」といおうとすると、う

さぎさんたちのまえに、大きな

しかさんがあらわれました。

「ぼくも、かけっこの中かまに

いれてくれたまえ。」

「いいよ。おはいり。」

「決勝点は、どこ。」

「あの山のとっぺんさ。」

「あの山のとっぺんか。わかった。」

しかさんは、のっそりと立って、山の方をみあげました。

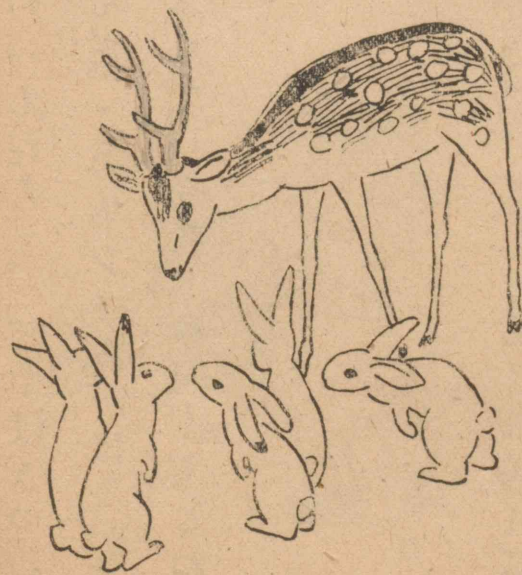
「なにかかけようじゃないか。」

「しかさん、ただ遊ぶんだよ。」

「ただ遊ぶんじゃないや。おもしろくない。なにかかけよう。」

「なにもいらないや。」

「勝ったものになにもないなんて話はない。どうだ、こうしては。」



しかさんは、もし自分が勝ったら、このしかの角で、うさぎさんたちをつきあげるといふのです。

「そのかわり、ぼくが負けたら、この角を、おってしまってもいい。」

うさぎさんたちは、困ってしまいました。どうせ、足の早いことにかけては、しかさんにかないません。そうすると自分たちは、あの大きなするどい角で、つきあげられてしまわなければなりません。

しかさんに勝ったところで、あの角をおるなどということはできません。角をとったところで、なんになりましょう。ちっともいいことではないと、うさぎさんたちは話しあいました。

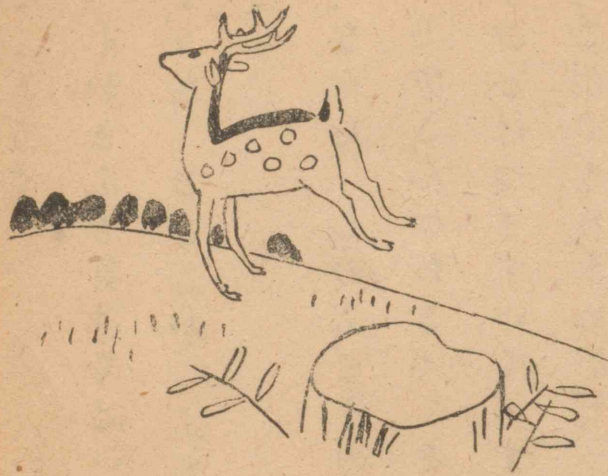
「さ、はじめよう。いいか。」

うさぎさんたちは、しかさんとならびました。しかさんは、

「ようい、どん。」

と、元氣のいい声をかけました。五ひきのうさぎさんと、しかさんとは、風のように走りだしました。ささの中、やぶの中をどんでいきます。

のぼりざかを走るのは、うさぎさんのもつともとくいとす



ところです。

しかさんも負けてはいません。角をふりたてふりたて走りました。ところが、ぶどうのつるに、角がひっかかりました。

「なんだ、このぶどうのつるめ。」

しかさんがおこって走ると、こんどはたおれた木のみきにトンとけつまずいて、すってんころりところけました。

「このくされ木めが。」

ぶんぶんおこりながら、びっこをひきひき、てっぺんにたどりつきました。

そこには、もううさぎさんたちはいませんでした。

そうして、木の切りかぶに、つぎのようなことが、赤いクレヨンで書いてありました。

「しかさん、私たちが勝ちましたよ。けれども、あなたの角はおりません。うさぎたち。」

「なんだと、ひとをばかにしている。ようしゃはならない。」

角についてやる。」

しかさんは、うさぎさんたちのあとを、どんどん追いかけてました。

うさぎさんたちは、谷をわたり、みねを一つこえました。長い森をくぐりました。そのうちに、しかさんは、いつのまにかはぐれてしまいました。

やがて、うさぎさんたちは、大きな岩いわのところにてました。

「ああ、こわかった。」

「ここまできたら、もう安心やすみだね。」

「よかった、よかった。」

五ひきのうさぎさんたちは、ここでゆっくり休むことにしました。ところが、この大きな岩のかけに、とらさんがねむっていたのです。

うさぎさんたちは、そのことをすこしも知りませんでした。とらさんは、晝ねをしていたのですが、うさぎさんたちがあ

まりガヤガヤ話をするので、目をさましてしまいました。

「いいごちそうができた。」

とらさんは、そっと首をのばして、うさぎさんたちの方をのぞきました。五ひきのうさぎさんたちは、あせをふいたり、ねころんだり、足をもんだりしていました。

とらさんは、いきなり、

「こら、うさぎども。」

と、われがねのような声をたてました。

うさぎさんは、びっくりぎょうてん、みんな地面にぺたんとうつぶしてしまいました。

「いいところへきてくれた。おなががぺこぺこなところだ。」

おいしい肉がたべられる。どれ、ごちそうになるうかな。
のそり、のそり、そばに歩いてきました。
うさぎさんたちは、もうにげようと思ってもにげることは
できません。

助けてくださいと、お願いしたところで、ゆるしてくれら
みこみもありません。

どらさんが手をのばして、一ぴきのうさぎさんのせなかを
おさえました。

うさぎさんたちは、いっしんになって、神さまにおいのり
をしました。

そのとき、

「こら、まで。」

という、それこそかみなりのような声がひびきました。それ
は、もう一ぴきのどらさんでした。

「おれがさきにうさぎをみつけたのだ。あの谷をわたるとき
に、ちゃんとみつけたのだ。そこから、あとをつけてきた
のだ。」

「おれが、いまたべようとしていたところだ。よこどりする
と、ゆるさないぞ。」

「なにを。」

「やるものか。」

一ぴきのどらさんが、いきなり、もう一ぴきのどらさんに

とびかかりました。

ニひきのとらさんが、つかみあいをはじめました。上になつたり、下になつたりしました。

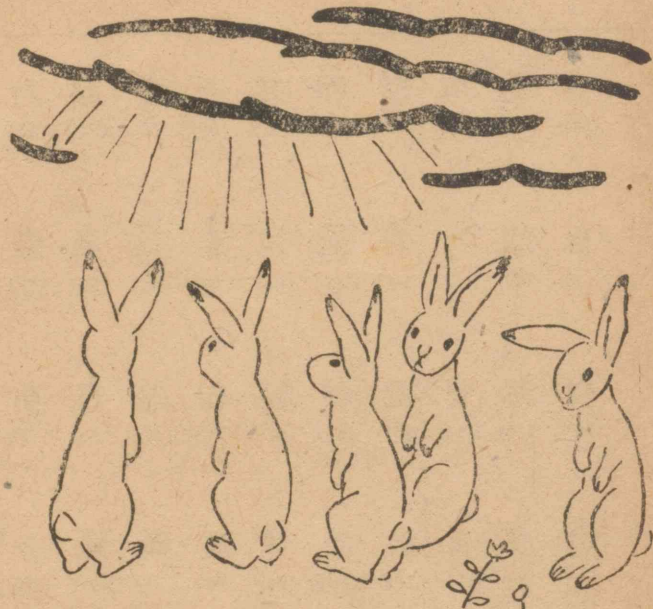
そのあいだに、うさぎさんたちは、手をつないで、そこをにげだしました。

どンドン、どンドンにげました。

山を、いくつも、いくつもこえました。

谷川にそって、山のふもとにでてきました。

やっとしずかな廣い野原にできました。野原には、日の光が
いっぱいさしています。クローバーの花が、まっ白にさいて
いました。おなかのすいた五ひきのうさぎさんは、だいすき



なクローバーをたべました。

みつばちさんがとんできて、

うさぎさん、ここは、しずか

なところですよ。安心して、

ゆっくりおあがりなさい。

と、うたいながらいました。

五ひきのうさぎさんたちは、

みつばちさんのことばを、たい

へんありがたく思いました。

國語 第三學年 下
 Approved by Ministry of Education
 (Date Aug. 6, 1948)

昭和二十二年十一月廿五日翻刻発行
 昭和二十三年八月六日修正印刷
 昭和二十三年八月三十日修正発行
 (昭和二十三年八月六日 文部省検査済)

著作権所有 著作兼発行者 文 部 省

兼翻刻者 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式会社
 兼印刷者 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式会社
 代表者 長 得 一

印刷所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式会社
 発行所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式会社

負 実 以 望 願 答 号 畫 顔 助 鉄
 (134) (122) (113) (100) (80) (65) (56) (50) (31) (15) (4)

岩 落 性 鏡 困 題 集 晚 向 樂 計
 (138) (122) (113) (100) (84) (66) (56) (51) (31) (17) (4)

肉 深 質 画 神 谷 相 遊 根 会 台
 (140) (126) (113) (101) (87) (67) (56) (51) (36) (17) (4)

は○でつつないだかん字は、とう用かん字べつ表(教育かん字)に
 廣 角 柱 面 妹 談 西 地 合 具
 (126) (114) (102) (90) (70) (56) (53) (36) (18) (5)

毛 骨 飛 兄 命 暖 聞 森 唱 役
 (129) (114) (106) (92) (74) (61) (56) (40) (18) (6)

追 外 機 病 息 温 來 朝 隊 喜
 (129) (115) (106) (94) (76) (61) (56) (43) (18) (10)

決 首 勉 見 問 度 行 寒 夕 活
 (132) (115) (107) (99) (78) (61) (56) (46) (26) (11)

勝 料 強 古 同 銀 第 繪 每 步
 (132) (117) (107) (99) (79) (63) (56) (48) (27) (13)

